

コードインリバーズ ～護士の因子～

偽薬

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは遙か未来の話である。

驚異の科学技術を誇るバースコーポレーションが世界を統治していた。

しかし弊害もあった。実験の過程で変異した動物、「リバース獣」を生み出してしまったのだ。

リバース獣は通常の動物より狂暴で、人を襲う事件も多発した。

この事態に対処すべく、バースコーポレーションは新たな生物兵器を開発した。

外見こそ人間と大差無いが、圧倒的な機動力を誇る

戦造人間を。

目次

プロローグ

第1話 　　く暴圧の前兆く 　　| 　　1

第2話 　　く暴圧は止まらないく 　　| 　　

11

第3話 　　く埋め込まれた邪心く 　　| 　　

24

第4話 　　く暴圧の終焉く 　　| 　　40

第一章

第5話 　　く新世代の予兆く 　　| 　　56

第6話 　　く発揮される力く 　　| 　　63

第7話 　　くその男、驕慢につきく 　　| 　　

73

第8話 　　くネクスト・ステージく 　　| 　　

87

第9話 　　く生存抗争く 　　| 　　98

第10話 　　くアクトレスと諸刃の拳銃 　　| 　　

く 　　| 　　105

第11話 　　く水と油と蟲の群れく 　　| 　　

113

第12話 　　アンレスト 　　| 　　127

第13話 　　雷神は空を征く 　　| 　　140

第14話 　　機械仕掛けのリベリオン 　　| 　　

159

第15話 　　下町アポカリプス 　　| 　　183

第16話 　　天使か悪魔か 　　| 　　201

第17話 時間よ、凍れ

—

プロローグ

第1話 暴圧の前兆

「KYURYYYYYYYYYYYYYYYYY!」

「……チツ」

龍のような風貌で山脈程の体躯を持つリバス獣の最上位種『ウルティマ・リクイダス』。

他のリバス獣とは格が違う。

流石のボイルも苦戦させられた。

「KYUOOOOOOOOOOON!」

開かれたリクイダスの口から無数の光弾が飛び散る。

「つあああああああつ!」

ボイルは、自分に向かってくるそれを全て素手で弾き飛ばした。

後ろに控えている彼の部下達も各々ガードしている。

「うああ……」

「……!」

ボイルは戦慄した。

最前線に立ってリクイダスに攻撃を加えていた部下の一人が飲み込まれていたのだ。といつても口からではない。リクイダスの腹がジェル状に変化していた。

「こいつ、体を液化化させるのか!？」

捕食を終えたリクイダスはボイルに視線をやった。

言葉こそ無いが、まるで非力な戦造人間をあざ笑っているかのようだ。

「一気にケリをつける……お前達全員下がれ！」

「えっ」

戸惑う部下達を他所に、ボイルは両手の平を向けるリクイダスに向け、そこから暴風波を発生させた。

「ぶげっ」

「OOOOOOONNNN……!」

逃げ遅れた部下達を巻き添えにしながらも波は確実にリクイダスの肉を削り取っている。

しかしリクイダスの方が一枚上手だった。完全に細切れになる前に自らの体を液化化させ、地面に潜り込んだのだ。

その様子を見て、ボイルは暴風を止めた。
これ以上続けても無駄と判断したのだ。

「……アアハアアアアアアア」

部下の死骸が散らばった周辺を見渡し、ボイルは深いため息をついた。

その後リーダーからリクイダスの生命反応が途絶えたため、ボイル達は戦場から本部に帰還した。

「惜しかったねえボイルくん」
「……」

ボイルに労いの言葉をかけているのは上層部の人間だ。
戦造人間ではない普通の人間のため戦闘力は無いに等しい。

しかし、彼には戦力部隊隊長であるボイルよりも強い権力を持っていた。

更に悪いことに、その目はむしろ怒っているようにも見えた。

「また部下を大勢巻き込んだのかね」

「……警告はしました。戦場では一瞬の差が命取りですから」

「そうはいってもねえ、困るんだよ。新しい戦造人間の生産が追い付かないんだ。それに君のこのメンバーはそれなりの精鋭揃いなんだし」

「そうですか」

「……まあ今後は当分残党狩りだけだろうから、気を付けるんだね」

「はい」

あからさまに気のない返事をしながらボイルは去った。

(お前は邪魔なんだよ、ボイル)

上司は内心舌打ちした。

上層部には彼以外にもボイルを嫌う人間は沢山いた。

思い通りに動かないからだ。

「失礼します。」

ボイルと入れ違いに、目に隈がある男が入ってきた。

彼はいわくつきの科学者、ヌクリア。

独断で何かの危険な研究をしており、上層部との癒着がなかったらとつくに解雇され

ていたであろう男だ。

「試合による例のテスト、実行してもよろしいですね？」

「もちろんだ」

上司はほくそ笑んだ。試合というのはあくまで建前。本当の目的は別にあつた。
「頑張つて奴を始末してくれよ、次期隊長君……」

そう呟きながら目を落とした電子端末にはとある新人の名前が表示されていた。

『CODEIN^{ティン}』

「おい」

「ああ？」

自室で寝転がっていたボイル。

声のした方に目を向けるとそこには馴染みの顔があつた。

ノギという名前の非戦闘員だ。

ボイルとは訓練生時代の同期であったが、戦闘力が規定値に達しなかったために非戦闘員の道を選んだ。

階級こそ違えどボイルとはそれなりの親交があり、それなりの出世もしていた。

「惜しかったな」

「はっ……皆口を揃えてそう言うよ」

「まあそう腐るな。それより、重大な知らせがあつてきたんだ」

「……なに？」

「明日、お前と訓練生ナンバー1の二人での試合が行われることになった。上からの命令だ」

「なんだと？なぜ俺がそんなことを」

「さあな。俺にはわからん。よっほどの実力者らしいけどな」

「なんなんだふざけやがって……」

数秒の沈黙の後、ボイルは捻りだすようにこう言った。

「……わかった、いくぜ。どうせ拒否権はないんだ」

ノギが部屋から去った後、ボイルは屈辱で顔を歪めた。

表面上こそ冷静に振舞ったが、内心激昂していたのだ。

自分が訓練生の相手をさせられるから、というだけではない。

知っていたのだ。

上司達の間で”ボイルを倒せる逸材”がいると噂されているということを。奴らは俺をつぶそうとしているんだろう。

何も知らない若い芽を摘むのは忍びないが、仕方がない。

この世は結果が全てだ。

一人きりの個室の中、ボイルはおぞましい表情で呟いた。

「……そいつには消えてもらおう」

「羨ましいぜコーデイン、隊長と試合できるなんてな」

試合当日、訓練生の二人部屋に呑気な声が響いた。

彼の名前はシナプス。訓練生でも上位に入るエリートだ。

「そんないいもんじゃねえよ」

そう言いながら嫌そうな表情を浮かべているこの男こそがコーデイン。

訓練生の中でもナンバーであり、この物語の主人公である。

「大丈夫だつて。いくら隊長でも手加減ぐらいはしてくるだろうし、上に実力をアピールできればそれでいい」

「おいおい、何俺が負ける前提で話してんだよ?」

「なんだよ、意外と乗り気じゃん」

二人は他愛ないささやかな会話で笑った。

二人は互いを信頼していた。

特にコーデインの方は生まれながらの天才。

クリーンな試合なら相手がボイルだとしても勝てる可能性がある。

シナプスはそう踏んでいた。

「さて、そろそろ行こうぜ」

「おう……いやちよつと待て」

ベッドの下の隙間に手をつ突っ込んでいるコーデイン。何かを探しているようだ。

「ヴァイタルコア、確かにベッドの下に入れたはずなんだが……」

ヴァイタルコアとは、戦造人間にとっての必需品だ。

外見は単なる薄い円盤だが、その内部には戦造人間の肉体を守るための特殊な装置が数多く仕込まれている。

「おいおいこんな時に紛失か？ 呆れた次期隊長だな」

「減らず口叩いてないでお前も探してくれよ！ あーやっぱりクローゼットの中かな……」

ぼやきながらベッドから離れるコーディン。

入れ違いにシナプスがベッドの下を覗く。

「んー……？」

その時、シナプスは奇妙に感じた。

何かが異様だった。

言葉では形容し難いが、強いて言うなら「祟」としか言いようがなかった。

影とはまた違う黒さだ。

「これは一体……」

しかし、その違和感はすぐに消えた。

瞬く間にごく普通の”空間”に戻っていたのだ。

そしてその奥には

「おいコーディン！ コア、ベッドの下にあったじゃんか！ しっかりしろよ！」

「ああ？」

コーデインは間の抜けた顔で振り返った。完全に拍子抜けだ。

「馬鹿な……隅々まで隈なく探したはず」

「手え隙間に突っ込んでただけじゃねえかよ！ほら、もういいだろ？行つてこい」

腑に落ちない顔をしながらも、コーデインは試合の舞台に向かった。

この時、彼はまだ知らなかったのだ。自分が手を入れた“隙間”で何が起こっていたのかを。

t o b e c o n t i n u e …

第2話　　～暴圧は止まらない～

ボイルより先に試合の舞台に到着したコーデインは、ヴァイタルコアを胸部に押し当てた。

その瞬間、胸に触れた部分から大量の黒い糸が飛び出し、白タンクトップだけだったコーデインの上半身がたちまち漆黒に染まっていく。

指先から首元まで、顔を除いた全ての体表が黒い繊維に覆われた。

下半身も例外ではない。

ズボンやシューズで隠れていて見えないが、股間や足も余すところなく覆われていた。

これこそが、全戦造人間の共通装備だった。

ただの布のようにも見えるが、圧倒的な強度と柔軟性で戦造人間の肉体を保護している。

装着者の生体エネルギーを吸い上げて構築されたものだ。

戦闘員だけでなく、非戦闘員も同じ装備を着けている。

もつとも戦闘員と非戦闘員のコアは規格が違い、戦闘員用の方は装着者への負担が遥

かに大きいため、戦場にはいない時は外されていることも珍しくない。

しかし、熟練した戦闘員の中には、常にコアを着けっぱなしにしている者もいた。現戦力部隊隊長のボイルもその一人だ。

これは試練だ。

試合開始を目前にして、コーデインはそんな考えを抱いていた。

武舞台の周りの客席からの沢山の視線。

特に上層部からの視線を意識せずにはいられなかった。

奴らはきつと俺を見極めようとしているに違いない。

ボイルとは違う強さを見せつけなければ。

保身のためだけではない。

これから起こることは、俺の人生において非常に重要な糧となるはずだ。

これといった理由こそ無いが、コーデインはそう確信していた。

そんなことを考えているうちにボイルも武舞台に上がってきた。

「ただいまより、隊長ボイルと訓練生コーデインの試合を開始します！」
審判の声が響き渡ると同時に、コーデインはボイルに向かっていった。

先手必勝。

それが今のコーデインの信条なのだ。

しかし、ボイルはそれをかわそうともせず完全にガードしていた。

「大丈夫なんだろうね……」

観客席でボイルの上司が苦い顔をしていた。

コーデインならボイルを倒せるかもしれないと聞いていたからこそ、この試合を企画したのだ。

しかし現状は圧倒的にボイルが有利。

このままでは上司の計画は破綻してしまう。

「なあに、心配いりませんよ。計算通りならね……」

上司の心配を他所に、隣に座っているヌクリアは怪しげに微笑んでいた。

(くそっ……)

コーデインは焦り始めていた。

実力差は覚悟していたがまさかこれほどとは。

(こんなに厚い壁なのかッ！)

コーデインはボイルの方針に不満を持っていた。

いくら敵を倒すためとはいえ、仲間の犠牲を厭わない戦い方はスマートではない。

だからこそ自分が次期隊長に就任し、方針を変えようと思っていたのだ。

しかし、この有様だ。

ボイルに手も足も出ていない。

このままでは、ボイルに口出しする権利など得られるはずがない。

(いくらなんでも……この厚さはねえだろう!!)

「づりやあああああああああああああああああああ！」

(若造が……)

ボイルは失望していた。

今回の試合に上層部の悪意を感じていたため多少警戒していたが、実際戦ってみると拍子抜けした。

あまりにも弱すぎる。

わざわざ本気を出すまでもなさそうだ。

「づりやあああああああああああああああああ！」

コーデインが拳を振りかざして向かってきた。

一方的な展開に焦っているのは明らかだった。

疲労からか、それとも恐怖からか、足取りもふらついている様に見える。

「ふんっ」

ボイルは右手の平をかざし、そこから空気弾を放った。

小さいが、この距離で食らえばどんなに強く踏み込もうと確実に場外に吹っ飛ぶ。

(終わった……所詮クズだな)

ズメキヤアッ。

次の瞬間、鈍い音が響いた。

「……うん？」

一瞬、ボイルはそれをコーデインが場外に落ちた音かと考えた。

しかし、次の瞬間にその認識が誤りだと悟った。

「……なんだとッ!？」

自分のすぐ横でコーデインが拳を地面にめり込ませていたからだ。

音の正体は、武舞台にヒビが入ることで生じたものだった。

「馬鹿な……」

「うおりゃあああああッ!!」

間髪入れずにコーデインが第二撃を加えてきた。

彼自身、どうして自分が無事なのかを理解してはいなかったが、とつさに体が動かすことが出来た。

生まれ持つての天才的な素質の賜物だ。

「舐めるなこの餓鬼ッ!」

「うわあッ!」

大きく振りかぶった拳をボイルに手で払いのけられ、勢いでコーデインは吹っ飛ばされた。

たしかしギリギリで場外はまぬがれた。

ボイルも不意を突かれて動揺していたため、腕に力が乗らなかつたのだ。

「ハアツハアツ、ふざけた真似を……」

今にも飛び掛からんとしているボイル。

しかし次の瞬間、不思議なことが起こった。

突然ボイルの頭に強い衝撃が走り、横に転倒して頭を勢いよく地面に叩きつけられたのだ。

試合に立ち会っている全員が息をのんだ。

「何が起こったんだ!?今……」

観客席にいたシナプスは絶句した。

「おおおっ!?!」

上司達は驚き半分喜び半分といった様子だった。

観客はもちろん、近くでその様子を見ていたコーデインさえも状況が理解できずにいた。

しかし、ボイルだけは自分が何をされたのかを理解した。

(今、衝撃は斜め下から飛んできた。その方向にあるものは……)

ボイルの目線の先にあるのは、先ほどコーデインの拳によって割れた地面の”隙間”。

(そしてあの触感は……間違いなく俺自身の空気弾そのものッ!)

常識的に考えて、コーデインに放った空気弾がボイルの方に向かってくるなんてあり

得ない。

いくらコーデインが天才とはいえ、実戦経験の無い訓練生のパワーで空気弾をはじき返すなど不可能だ。

しかもすぐではなく何秒かのタイムラグがあった。

返ってきた攻撃。時間差。そして”隙間”。

にわかには信じ難いが、仮に自分の立てた仮説が正しいとしたら……

考察が終わる前にコーデインの飛び蹴りがボイルに命中した。

「ぐはあっ！」

「ふんっ！」

「ぐううっ！」

命中しては離れ、命中しては離れる。

所謂ヒットアンドアウェイ戦法だった。

ボイルはスマートで洗練されたコーデインの動きに対応できず、一方的に攻撃を受けている。

（何かわからんが、勝てる！）

もはや形勢は完全に逆転していた。

（こいつ……生かしておけないッ！生かしておけば確実に俺の邪魔になるッ!!）

目を前に向けると、コーデインが眼前に迫ってきていた。アツパーの体勢だ。

「来るか……」

「づあツツ……ああ？」

今度はコーデインが驚く番だった。

目の前からボイルが消えていた。

空振りしたはずなのに、一体どこに消えたのか。

「だが次の一手で終了だッ！」

上空から声がした。

見上げると、ボイルは真上に飛び上がっていた。

既に豆粒ほどの大きさにしか見えなくなっている。

その時、コーデインはようやく気が付いた。

辺りに不自然な風が吹いていたことに。

ボイルが能力で風を起こし、自分の体を上に運んでいたのだ。

しかし時すでに遅し。

「アアハアアアアアアアアア!!」

雄たけびと共に時速100km重さ100kgの膝蹴りがコーデインの胸に叩きつ

けられた。

「ぐげっ」

ミシミシツとヴァイタルコアにひびが入り、コーデインの意識は黒に塗り潰された。

観客席にざわめきが広がる。

致命傷だった。

いくら戦造人間といえども、ボイルの全力の落下攻撃を食らって耐えられるわけはない。

「そんな……」

「おい、判定はどうした」

引いている審判をボイルは睨みつけた。

「えっ……しよっ、勝者、ボイル！」

これに慌てたのは上層部の人間だ。

頼みの綱のコーデイン敗北してしまった。

しかも、建前とはいえ練習のための試合で相手に致命傷を与えるなど前代未聞だ。

この一件が世に出回れば、バースコーポレーションは多大なバッシングを受けることになるだろう。

「ヌクリア貴様ああああああああああ！これはどういうことだ！」

上司の一人が血相を変えてヌクリアの胸ぐらを掴む。

しかしヌクリアの方は悪びれる様子も無かった。

「ああああ残念です。ちよつと予想が外れましたね」

「ちよつと……だと……？もういい！貴様はクビだ！」

そう吐き捨てると、上司たちは足早に去っていった。

しかし、ヌクリアは何故か余裕げだった。

「いいんですよもう……私の計画はこれから始まるんですから」

「ポイル！お前一体どういうつもりだ！」

部屋に戻ったポイルの元にノギが駆けつけてきた。

「なんの話だ？」

「とぼけるな！ナンバーの訓練生を故障させるなんて！わざとやったんだろう！」
「ああ…まあ、本気を出し過ぎてしまったかな」

「なんだと貴様あ！隊長として、恥を……」

恥を知れ、とノギは言おうとした。

しかし言えなかった。

ボイルがこちらを見ていた。

その目で見つめられるだけで、気力を砕かれるような感覚に襲われた。

「……弱者が恥を語るな」

その一言で、ノギの中で何かがキレた。

「つツ……もういいッ失望したッ！お前との付き合いも、今日これまでだッ！」

そう吐き捨て、ノギは部屋を去っていった。

向かった先は病棟。

そこには重傷を負わされたコーデインが搬送されており、ノギがその治療を担当することになっていた。

バースコーポレーション本部の最上階に存在する秘密の部屋。

その存在を知る者は誰もいない。

ただ一人、ヌクリアを除いて。

「さて……私のために働いてくれよ」

そう呟くヌクリアの手元には濁った赤色をしているヴァイタルコアに似た円盤。そしてその目線の先には、一人の少女がベッドに横たえられていた。

t o b e c o n t i n u e …

第3話　　く埋め込まれた邪心く

「ひとまず安心、といったところだな」

病棟では、ノギと医師団がコーデインの治療にあたっていた。重傷を負ったコーデインだったが、次第に回復しつつあった。

「ノギさん！」

慌てた様子の非戦闘員が駆け込んできた。

「どうした」

「社長からの緊急伝達が……！」

何かを耳打ちされ、ノギは青ざめた。

「なに!? 令嬢がヌクリアに……!?!」

「……そうか」

コーデインを再起不能にした張本人であるボイルにも伝達は伝わっていた。
「すぐ向かう。精鋭部隊を集めろ！」

「さて、これが最後の工程だ。これを終えればもはや君は人間ではない」
「わかってる……」

「しかし令嬢の身でありながら自ら人体改造に志願するとは殊勝な心掛けだね、ミセル」
「私のためじゃない。我が社のため、そして……」

バースコーポレーション令嬢のミセルは喉元まで出掛かった言葉を飲み込んだ。

コーデインのため。

ミセルは以前から戦力部隊がボイル一強になることを危惧していた。

そんな時に、自分と同世代でありながら次期隊長候補と名高いコーデインと出会った。

「ねえ、コーデインはさ、今の戦力部隊のことどう思ってる？」

ある日、ミセルは思い切ってコーデインに聞いてみた。

「ああ？」

突然の質問に困った顔をしながらも、コーデインは答えた。

「少なくともスマートではないな」

スマート。それはコーデインにとっての指標であった。

真に洗練されたパワーは無駄な破壊を伴わないとも考えていたぐらいだ。

「このままだと、戦闘員はどんどん減るだろうな」

ミセルも同感だった。

この時、ミセルはコーデインに惹かれていた。

会う回数こそ少なかったが、自分と同じ考えを共有できる初めての相手だと考えた。

しかし、それと同時に一種の危うさも感じた。

そして今、ミセルの心配が現実のものとなった。

コーデインが再起不能になったのだ。

もし今後ボイルがいなくなったら、主力部隊はたちまち崩壊するだろう。

しかし、もし非戦闘員でも強力な戦闘力を発揮できるようになりさえすれば状況は改善するだろう。

それを証明したい。この身を犠牲にしても。

今こうして人体改造を受けているのもそのためだ。

「なんだって?」

感傷に浸っていたミセルはヌクリアの呼び声で現実に戻された。

「なんでもないわ。早く終わらせて」

「了解……」

ヌクリアの顔に下品な笑みが浮かんだ。

「……来てくれたかボイル」

「これはこれは社長殿」

バースコーポレーション本社5番塔。その最上階にヌクリアの研究室はあった。

ミセルは人体改造が公認企画だと思っていたが、実際は違った。

全てはヌクリアの越権行為。そして令嬢は囚われの身。

この事態に対処すべく、精鋭戦力部隊と社長が直々に殴り込もうと合流した。

「できれば勝手な行動は慎んでもらいたい。何せ社長は戦造人間じゃあない」

「ふん、どの口が言うか！」

戦造人間でないものの、社長もなかなか胆のすわった男だった。

さすが世界を牛耳る大企業のトップなだけのことはある。

対ヌクリアの作戦はこうだ。

最上階にボイルを含めた戦闘員20名と社長、残りの戦闘員はヌクリアが逃げたときに備えて下の階で待機。

全員が配置についたことを確認し、社長達は研究室に突入した。

「ヌクリア！ 貴様私の娘を……！」

社長は驚愕した。

娘が怪しげな機械をとりつけられてベッドに横たえられていたからだ。

「えっ……っ？」

ミセルも驚いた。

「どういうこと……っ？この計画はお父様にも承知のことなのでは……っ？」

「とんでもない！娘が改造されるなんて、そんな話は一言も聞いておらんぞヌクリアア
！」

「ああッ！そっういえば……言い忘れてました。ふっハハハハハハハ！」

狭いヌクリアの笑い声が響き渡った。

「ふざけるな！今すぐ娘を開放しろ!!」

「いいですよ」

次の瞬間、ミセルは社長のもとに駆け寄っていた。

「おお、ミセル……ッツ!?!」

安堵したのも束の間、社長は顔を引きつらせていた。

いたのだから。

ミセルの手が自分の腹をえぐって

「!？」

予想外の展開に、側にいたボイルも面食らった。

「えっ……そんな、？、こんなっ……!？」

しかし一番驚き、怯えていたのはミセル自身だった。

手が本人の意思と無関係に動いたのだ。

それも驚異的なパワーで。

「んふふふッ！見ましたねッ？今の彼女のパワー！そして彼女の胸部にあるものこそそのパワーの源であり私の最高傑作！あえて名付けるとすれば“邪心回路”ッ！！」

ミセルの胸元には、確かにヴァイタルコアのようなものが埋め込まれていた。

しかし通常のコアが緑色に発光しているのに対し、こちらは濁った赤色をしていたが。

「ミセルッ……どうしてえっ……」

社長は力なくどざりと倒れこんだ。

「そんな……お父様っ、違うのこれは私じゃ……」

「いーいや！社長を殺したのは他の誰でもない、君だよ！そう、君は既に支配されている
！！」

ヌクリアが興奮気味に叫んだ。

「恐ろしいのかい？大丈夫今慣れさせてあげよう！」

いつの間にかヌクリアは拳銃を倒れている社長に向けていた。

「父親の頭蓋骨が砕け散るところを見ッッ」

しかし、頭が砕け散ったのはヌクリアの方だった。

ヌクリアが発砲するよりも早くボイルの空気弾が命中していたのだ。

「下衆が口を開くな……!!」

「うああああはは……!!」

顔をぐちゃぐちゃに潰されているにも関わらず、ヌクリアは笑っていた。

「かま……わない……!!」

ヌクリアはがくがくと震える手をコンピュータースクリーンにかざした。

「なっ……!!」

次の瞬間、ヌクリアが消えた。

死んだという意味ではない。

真正正銘、言葉通りに“消え失せた”のだ。

「一体どこに消えた………ッ!?!」

倒れた社長に目もくれず、コンピューターに駆け寄ろうとしたボイルの前に立ちはだかる者がいた。

ミセルだ。

「何をなさ…ッ!？」

次の瞬間、ミセルの蹴りが空を切った。

「ミセル様!？」

その場にいた戦闘員達は突然の事態に啞然としていた。

凄まじい衝撃が遠く離れていてもビリビリと伝わってくる。

ボイルはとつさに後退りしたが、もし食らえば大きなダメージを負っていたことだろう。

「ミセル様!？」

一人の戦闘員が駆け寄ろうとした。

「一体どうしてしまったので…!？」

べちゃっつという音が聞こえ、彼は。

自分の身長はご令嬢よりも大きいはず。

なのになぜ自分の目線は彼女の足と同じ高さしかないのか…!？」

そんなことを考えてを中断させるかのように、真横でどざりと音がした。

何故か首が動かないから、目線だけを…!？」

「……………!？」

そこにあつたのは、首から上がなくなった男の体。

「撃てえええええ!!」

見かねた戦闘員達が発砲した。

全戦闘員の共通装備の一つ、“イレイザー”。

それは戦造人間のために特殊な銃であり、戦造人間の生命力を材料にエネルギー弾を発射する。

使い手の実力に比例して威力も上がる。

18名の精鋭達の集中射撃ともなれば、並のリバース獣なら簡単に倒せる代物だった。

しかし、ミセルは違った。

全弾をノーガードで受けて傷一つ負っていない。

「あんた達の威力ってそんなモンなのオ……?」

「……何ッ!？」

「そういえばさアアア、熟練した戦闘員はイレイザーを介さずにエネルギー波を出せるらしいわよねエエエ……私もやってみようかしらア」

ミセルが腕を振った瞬間、18名の戦闘員達の胴体が吹っ飛んだ。

彼らは口を開く暇さえ与えられないまま息絶えた。

「……どうしてそうなったのかは知らんが、大したパワーだ」

しかし、一人だけ生き残りがいた。

ボイルだ。

「こういうのはどうでしょうお嬢様。乱心した令嬢が突如発狂し、戦闘員数名を殺害。しかしその正当防衛として戦力部隊隊長ボイルによつて処刑された、というのは……」
口調こそ丁寧だが、その目は殺意に満ちていた。

令嬢を殺して鬱憤を晴らせる。責任も経営側に押し付けることができる。

正に一石二鳥。またとない好機だ。

「あらあアア……いいんじゃないかい？」

興奮しているのはミセルも同じ。

今や彼女は人でも戦造人間でもない。もはや殺戮マシンそのものだ。

膨大な殺気を放ちながら睨みあう二人。

周囲の大気がうねり始めていた。

「応答がありません!」

「一体最上階で何が起こっているんだ!?!」

一つ下の階で待機していた小隊は混乱していた。

状況が把握できない。

確かなことは、上から凄まじいパワーを感じるということだけだ。

「くそっ……今日は厄日か?」

訓練生のシナプスもそのメンバーだった。

本来なら精鋭部隊に参加するのはコーデインのはずだったが、補欠としてシナプスが呼ばれたのだった。

「俺も無事で帰れるかどうか……!」

シナプスはコーデインの、いや、戦力部隊全体の心配をしていた。

なにか、とてつもなく嫌な予感を感じる……

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
:
:

第4話 暴圧の終焉

異変が起こってから既に10分が経過していた。

上の階から凄まじいエネルギーを感じる。

それも一つではなく二つだ。

二つのエネルギーが激しくぶつかりあっている

そのせいでエレベーターは故障し、精鋭部隊のほとんどが下の階に取り残されていた。

戦闘員の一人がモード変更の操作をし、胸部からヴァイタルコアを取り外した。

ヴァイタルコアには通信機器としての機能も搭載されているのだ。

「ボイル氏からの連絡は？」

「まだ来ていません！」

既に何でも通信を試みているが、いずれも応答なしだ。

「我々が階段で上がります！」

「あつ、おい待て！」

上司の制止を無視して戦闘員4名が階段を駆け上がっていった。

「……うわああああああああああああああああああ!!」
程なくして悲鳴が響き渡った。

上司が様子を確認しに行くと、そこにはおののいている戦闘員3人と、道を塞ぐ瓦礫だけがあった。

瓦礫の下からは、人の腕と赤い液体がはみ出ている。

「……はもう無理です……!」

一人が絞り出すようにそう言った。
もう

立ち向かおうとする気力さえもへし折られたようだ。

「一体上で何が起こっているというのだ……!」

「くっ……なんて奴だ……！」

ボイルは戦慄していた。

ボイルの空気弾をまともに食らったはずのミセルが無傷で立っていたからだ。

遡ること10分。

血が広がった最上階でボイルとミセルは向かい合い、互いの様子を伺っていた。

最初に攻撃を仕掛けたのはボイルだった。

西部劇のガンマンの如く、腕を上げると同時に空気弾を発射。

たちまち爆煙が舞い上がった。

「……なんなのオオ？今のさアアアアア」

ボイルの自信が揺らいだ。

俺の空気弾は並の戦造人間では耐えられない。

既に部下で実験済みだ。

(一体こいつの体はどうなったというんだ……!?)

「それじゃ次はこっちの番……ほらほらほらほらあつっ!!」

ミセルの反復攻撃がボイルを襲った。

「ぐふっ……ッー!」

ボイルの胸骨がきしんだ。

スピードも、パワーも、いかにもお嬢様といった風な華奢な外見に似合わない程に上昇している。

「なんか反応しなさいよおおおお隊長さああああああん!!」

「ぐおおああああつ!!」

ミセルの拳に吹き飛ばされ、ボイルは壁に叩きつけられた。

「さあああて……とどめ、刺しちやおうかしらねエエエエツ!」

「ぐうう……アアハアアアアアアアアア!」

ボイルは力の限り叫んだ。

それと同時に大量の気がボイルの体内から放出される。

「あらア……まだやれるんじゃない」

「はあ……はあつ……よくもこの俺にここまでやってくれたな……!」

密室の中で、強烈な風が吹き荒れた。

「そんなお嬢様には……この、戦力部隊隊長ボイルの真の威力、思い知らせてくれるツツツ!!」

勢いよくボイルが飛び出す。

弾丸よりも速いそのスピードに対応できず、ミセルはその突撃をガードできなかつた。

「くうウウ……ツ！今までは本気じゃなかったとでも言いたいわけ!」

吹っ飛ぶ途中で地面に足を立てて体勢を立て直したミセル。

「調子ぶっこいてんじゃあないわよ35のオッサンがあアアアアアア!!」

追撃せんと向かってくるボイルに蹴りを入れる。

威力は相殺され、ボイルが一瞬よろける。

その隙を逃さず第二撃を……

「ツツ!」

ミセルの拳は空を切り、地面に当たっていた。

視界からボイルが消えていた。

普通なら、あの姿勢で攻撃を避けるなど不可能なはず。

だがその瞬間にボイルがどうなったのか、ミセルには見えていた。

彼は空気で自分の体を運び、超スピードで回り込んだのだ。
回り込んだ先は……当然、”背後”。

「そらあッ！」

ボイルの強烈な正拳突きが背中中にめり込む。

「ギッ」

その衝撃と激痛に耐えかね、ミセルはあえなく吹き飛んだ。

「ギアああああああああ……！！」

勢いのまま地面を転がるミセル。

その顔からは先ほどまでの余裕は消え、代わりに激しい憎悪がそこにあった。

「ぶっ殺す……！……許さないブツ殺すウウウウウ！！」

「許さないだと？」

反撃の姿勢をみせるミセルに対してボイルも身構える。

「こちらは最初から許すつもりなど無い」

「……………」

数秒の沈黙の後、二人は同時に駆け出し、攻撃に移った。

「オ」

の

下

衆

があああ

「……自分の勝ちだ。そう思ってるんでしょ？」

ミセルの顔に笑みが浮かんだ。

「……何？」

「確かにあんたは強い……間違はなく最強の戦造人間よ……さつきだつて徐々にパワーが増しつあつた……あんな短期間で急成長するなんて正直今の私にも不可能」

淡々と言葉を述べるミセル。

「もしこれ以上戦いが長引いていたら……負けていたのは私の方だった」

その言葉にボイルは疑問を抱いた。

「貴様一体……ッ!？」

ボイルの質問が終わるよりも早く、弾丸がボイルの胸を貫いていた。

「……………何だとおおオオオオオオオオオオオオ!?」

「かかったわねエ間抜けがアアアアアアア!!」

ボイルの断末魔の叫びに被さるようにミセルの高笑いが響いた。

「さつきあんたが私の攻撃を避けたとき!地面に小型のミサイルを仕込んでおいたのよオオオオオッ!!これこそヌクリア様の技術力の賜物よねエエエ……………えつ……………?」

一瞬、ミセルの顔に正気が戻った。

(私、今、ヌクリア様、って……なんで……!!?)

ミセルの心に迷いが生まれていることなど知らないボイルは激昂していた。

「この……俺が……この俺があああああつ！」

「!!?’

その時、ミセルは見た。

ボイルの体から、目に見える黄金のオーラが漏れ出始めている所を。

その瞬間、恐怖が疑問を塗りつぶし、ミセルは再び殺人マシーンに戻ってしまった。

「いい加減……くたばりなさいアアアアアアアア!!’

腕が振り下ろされ、のめり込む。

胸骨を粉碎され、心臓が潰される。

「いっ！」

ボイルは、息絶えた。

体を纏いつつあったオーラも、みるみるうちに消えていく。

「勝った……ッ！」

しかし安堵も束の間、ボイルの遺体から凄まじい突風が発生した。

「!?’

部屋の中の機材はもちろん、壁や床まで抉り取っていく。

「なんだって!？」

その場の全員が示し合わせたかのように驚いた。

リバース獣の最上位種さえも倒したあのボイルが死んだ。

その知らせは、戦造人間達の士気を打ち砕くには十分過ぎた。

「一体どんな化け物が相手だっというんだよ……」

メンバーの大半が完全に意気消沈する中、とあるメツセージを入力している男が一人いた。

シナプスだ。

(すまんコーデイン、俺はもうダメかもしれない……!)

シナプスは死を覚悟していた。

いくら将来有望とはいえ、訓練生では戦闘力はお察しだ。

ならばせめて、ある重大な事を伝えておきたい。

(これが、遺言ってヤツなのか……)

次の瞬間、塔が振動した。

「なんだ……!?!」

上を見た瞬間、その意味はわかった。

床が崩れ落ちてきていたのだ。

その瓦礫は、当然戦闘員達に降り注ぐ。

「うわああああああ……」

それだけではない。

瓦礫に続き、暴風が吹き荒れ、壁を抉り、潰された戦造人間達をフードプロセッサの如くかき回した。

—— こうして、バースコーポレーション本社5番塔の頂上部は崩壊。

戦闘員達は……ほぼ全滅した。

「くそっ……………!!」

「落ち着くんだコーデイン! 過ぎたことだ、もうどうにもならん!」

治療室から出ようとするコーデインをノギが制した。

「違うんですよノギさん! 俺が心配しているのは今後のことです! 戦闘員がいなくなったら、残っているリバース獣をどう駆除するんですか!!」

「大丈夫だ、最近生まれただばかりの新世代がいる!」

「じゃあそいつらが成長するまで待てというんですか!? そんなことはできない!」

「そうだな……………」

正論を突き付けられ、ノギは黙ってしまった。

「……………俺が戦うしかないのか」

コーデインは冷静さを取り戻していた。

「そうだ……………今や君が希望なのだから……………? 何をしているんだ?」

コーデインがベッドの下に手をつっ込んでいる。

「すみません、ちよつと……………おかしい……………またコアが消えた……………さつき新品をもらったばかりなのに……………?」

探し物をしているようだが、コーデインが貴重品を簡単に紛失するとは思えない。

不審に思つてベッドの“隙間”を覗いてみると……

「これは……!? コーデイン! ベッドの下を見ろ!」

「一体どうしたんで……!?」

二人は目を疑つた。

そこに広がつていたのは、“亜空間”だった。

言葉には形容し難いが、その異様さは一目でわかつた。

「これはッ……!?」

コーデインが手を引つ込めると同時に、空間は元に戻つた。

「あつ……あつたね、ヴァイタルコア。」

「ああ……はい」

ノギの言う通り、そこにはヴァイタルコアがあつた。

ノギからコアを手渡されながらもコーデインは驚きが消えない様子だ。

「まさか……これは俺の、“能力”だということか……? ボイルのような……?」

「隙間に亜空間を生み出す能力か……」

隙間に手を入れることで亜空間を生み出す。

お世辞にも戦闘向きとは言い難い。

「だが、能力が発現したのだから、高い戦闘力を持つているということは間違いない……」

「コーデイン！」

ノギは何か思いつめた顔でコーデインを見た。

「……しばらくの間、最前線で戦ってくれないか？」

ノギは“覚悟”を要求しているのだ。

不況の意思を黒く保ち続けることに対する覚悟を。

「……もちろん」

それから16年が経過した。

とある山奥の川沿いに悲鳴が響いた。

空から巨大な鳥のリバス獣が降りてきたのだ。

キャンプ中の一団は全員一目散に逃げ出したが、一人の子供が石に躓き転んだ。

「KYOOAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

鳥は逃げた大人達を追いかけようと走り出した。

道に転がっている子供の頭上に、巨大な足が振り下ろされ……

「ズブゲツ」

しかし、子供は無事だった。

足が地面に触れるよりも早く、鳥は何者かに蹴りを入れられ、吹き飛ばされていたからだ。

弾丸のように突っ込んできた“それ”は、人の形をしていた。

“それ”は壁にめり込む鳥を尻目に、子供に声をかけた。

「今のうちに、早く逃げろ」

彼の名はコーデイン。年齢34歳。

バースコーポレーション戦力部隊隊長であると同時に、この物語の主人公。

第一章

第5話 新世代の予兆

バースコーポレーション戦力部隊が壊滅してから16年が経過した。

ボイルがいなくなつたことにより、生き残つていたりバース獣は各地に散らばり、再び繁殖し始めていた。

新隊長に就任したコーデインは自ら戦力部隊の最前線に立ち、殲滅活動に勤しんでいた。

そして現在、彼は巨鳥ブラーフの討伐にあたつていた。

「KUWOOOOOOOOOOOOOOOONNNN!!」

一直線に向かつてくるブラーフ。

その体はまるで鉄の塊のように巨大だ。

しかし、コーデインは動かなかつた。

それどころか彼は手で自分の衣服を掴み、引っぱり始めた。

そして、あろうことか繊維を引きちぎり、その隙間に手をつ突っ込んだのだ。

一見するとまるで意味のない行動だ。

傍から見れば、戦意喪失したのかと思われるかもしれない。

しかし、それは無知による大きな間違いだ。

「!?!」

次の瞬間、ブラーフの眉間の肉が抉り取られていた。

しかも攻撃対象であるコーデインの姿が消えている。

急にブレーキをかけきれずに、岩壁に傷口をぶつける。

「GWOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOONN!?!」

あまりの激痛で、コーデインが既に背後に回り込んでいることに気が付いていないようだ。

そしてその手には、先程までは無かったはずの金属が握られている。

サーベルのような持ち手がついているが、その先端は丸く、剣というよりもむしろ鈍器に近いものだった。

「民間人の避難は済ませた。後は任せる」

コーデインは胸部から取り外したヴァイタルコアを手に持ち、それに向かって話しかけた。

それを合図に、物陰からおよそ10人もの戦闘員が姿を現し、ブラーフに向けて集中射撃を始めた。

「NOOOOOOOOOOW……」

既にダメージを追っていたブラーフがそれを避けられるはずもなく、頭部を蜂の巣のようにされて息絶えた。

「これでまた一匹減ったな……」

本部に戻ってきたコーデインは、今回の事件を報告書にまとめて上層部に提出した。

「全く……16年も経っているというのにまだこれだけ倒せていないのかね。リバース獣は全部でまだまだ沢山いるというのに！」

上層部の人間との面会だ。たとえどんなに強くても、戦力部隊隊長の権限は経営部上層部には及ばない。

「申し訳ありません」

コーデインの殊勝な態度に、上司の怒りは薄れたようだ。

「……まあ、あの惨劇から生き残った有力者は君ぐらいだから仕方ないかな。だが、明日からは新人達の研修期間が終了して本格的に戦いに加わることになる。だから今後はおつとペースアップしたまえ」

そう、それなんだ。

コーデインは内心そう思った。

リバーズ獣にも階級というものがあるらしく、下位種と上位種（それと最上位種であるリクイダス）がいる。

詳しいことはわかっていないが、下位種の数が多いところにはなぜか上位種は現れないという習性がある。

だから新人達が戦力部隊に加わるときまで、下位種の数減らし過ぎないように討伐ペースを調整していたのだ。

そして明日がその時だ。

「……ノギさん、今からそちらに向かうので例のリストを準備しておいてください」
コーデインはヴァイタルコアでノギにメッセージを送った。

「いよっしやー……」

訓練生の部屋が並んだ廊下に威勢のいい叫び声が響き渡った。

「うおおい……相変わらずうるせえなお前は」

声の主の隣にいる足の長い男、"カスケード"が呆れ顔でぼやいた。

「なんでだよ!!お前だつて聞いただろ?明日から選抜メンバーの選別が始まるつて噂!俺達を選ばれるかもしれないんだぞ!!?」

声を張り上げ続けている青年の名は"ファラデー"。

見ての通り、血気盛んな若者だ。

「まだそんなこと言つてんのか?選抜なんてする意味ないだろお。わざわざ数絞つてど
うするんだよ」

カスケードは冷静そのものだった。

今更じたばたするぐらいならこれまで通り任務を遂行すればいいだけ。

それが彼の考えだからである。

「こらそこの二人!廊下を歩く時ぐらい静かにしなさい!!」

怒った顔をした女性が歩み寄ってきた。

「まあまあそうカリカリしないでテルミット!!」

「お前ときたら、叱られてるのにその態度……ってちよつと待つてなんで俺も!?!」
カスケードが渾身のノリツツコみをかました。

たまたま近くでその様子を見ていた一人の男がその様子を後目に立ち去った。

（選抜? お前らのようなカスどもは選ばれんよ……新世代のエリートはこのゾルなんだからな）

三人から離れた場所で、男はほくそ笑んだ。

「ロクシヨウお前、聞いたか? 上位種討伐に向けた選抜メンバーが選ばれるっていう噂
!」

食堂の片隅で訓練生達が雑談をしている。

「そんな噂があるのか……? まあ俺には関係ないな、非戦闘員だから」

“ロクシヨウ”と呼ばれた男がそうそっけなく答えた。

フアラデーと違ってあまりやる気が感じられないが、彼もまた訓練生であった。

「まーたそうやって。お前なら十分戦闘員としてやってけるって」

「嫌なんだよ、そういう面倒なの」

この時、ロクシヨウはまだ知らなかった。

自分の名前が選抜メンバー候補のリストに入っているということ。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

第6話　く発揮される力く

講堂に、先日訓練課程を修了したばかりの新人が集められていた。

「……私からは以上だ」

コーデインの号令によつて、就任式は終了した。

この時をもつて、彼らも正式な戦闘員となつたのだ。

「早速だが、君たちにはこれからリバース獣討伐に向かつてほしい。我々も同行する」
「おお……！」

ファアラデーは興奮した。

これまで自分たちは対人戦などによるシミュレーションしかしたことがなかった。

これからようやく本物のリバース獣と戦えるのだ。

その実感が、ファアラデーの心の底の使命感を滾らせていた。

「それでは、チーム分けを行う！」

「コーディン、フアラデー、ゾル、ロクシヨウの四名は山奥の湿地帯に向かっていた。じゃあお前、ホントは非戦闘員になるはずだったのか！」

「いやまあ、ギリギリ及第点だったんで」

フアラデーはロクシヨウの奇妙な経歴に興味深々なようだ。

戦造人間にとって、戦いはあくまで職務にすぎない。

しかし、このフアラデーの思想は違った。

リバース獣を殲滅し、人々の平和を守る。

そんな所謂模範的なヒーロー像というものを信じ切っており、正義感に溢れていた。

それに対してロクシヨウは本来非戦闘員になるはずだった。

しかし戦闘力指数が戦闘員加入条件に達していたために急遽戦闘員に加えられることになったのだ。

戦うことはあまり好きではない。

面倒だから本当はやりたくないとさえ思っていた。

しかし、与えられた職務を遂行しようとする気高い前向きさも持ち合わせている。

それがロクシヨウという男だ。

「それにしても、他の班は10人単位なのに俺達だけ4人だけとはな」

「最強の隊長リーダーコーデインさんが一緒なんだ、妥当な班分けだと思うぜ」

フアラデーとロクシヨウが話し合っている間、ゾルは終始不満げな顔をしていた。

（冗談じゃない……まさかこの俺がためえら二人と同レベルだとも……？）

ゾルは自分がコーデインの次に強い、ナンバー2に相応しい男だと思っていた。

だからこそこんな二人と同じ扱いを受けることが許せない。

異常なまでにプライドが高いのだ。

「着いたぞ、降りろ」

ビークルから降りた四人は周囲を警戒した。

下位種とはいえリバース獣だ。

どこかに潜んでいる可能性もある上に、不意打ちを食らえば致命傷を負いかねない。

「この辺りの様子は？」

コーデインがビークル内に駐在する非戦闘員に問いかける。

「高感度センサーの反応によると、ここから一帯は大丈夫です。どうやら少し先で同じ場所をぐるぐる回っているようですね」

「そうか……お前たち、行くぞ」

「はっー！」

四名は注意深く奥地へと進んでいった。

「BUMOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

「……なるほど、あれか」

その先にいたのは、草木を蹴散らしながら走り回る巨大な猪、フアングロウだ。

その目は血走っており、完全に闘争本能に支配されているようだ。

「総員配置につけー！」

その号令を合図に四人は散らばってフアングロウを取り囲んだ。

下位種は理性的な行動をしない。楽な相手だ。

「BUUUUUUUUUUUUUUUUUUUUU!!」

「……!?!」

しかしその思い込みが罠だった。

今までただ円を描いて走っていたフアングロウの軌道が変わり、ロクシヨウに突進し始めたのだ。

「しまった！ロクシヨウ!!」

フアラデーの悲痛な叫びも空しく、フアングロウはロクシヨウに突っ込んでいく。「ふん、成り上がりがらしいあっけない最後だな」

それを見ながらゾルはロクシヨウを嘲笑うかのような笑みを浮かべていた。

“富久”

「!!」

ロクシヨウはフアングロウに平手を突き出した。

力が込められているようには見えないその手が、フアングロウの体に触れる。

次の瞬間、フアングロウの軌道が逸れた。

まるでサルスベリの木に登ろうとする子供のようにツルリと滑ったのだ。

(力を外側へと逃がしているのか……!)

柔よく剛を制するという言葉を体現するかののような拳法による戦闘スタイルにコー

デインは思わず関心した。

「すげえ！お前そんなこと出来るんだな!!」

「これが非戦闘員から抜擢された理由ってわけか」

しかし弱点である燃費の悪さを見て見ぬふりして実践投入したのは大失敗だ。そのことは、ゾルのプライドに傷を残すのに十分であった。

「…………お前、何を!?!」

顔を上げたゾルは目を疑った。

フアラデーが自分を庇うように立ちふさがっていたからだ。

「ゾルは俺の仲間だ!!こんなところで死なせるかよツ!!」

「ああ!?!脳ミソ溶けちまってんのかためエはよオオオオ!!犠牲者が増えてるだけじゃあねえかツ!!」

「くそツ……………」

コーディンは二人を助けるべく駆け出した。

「…………ん!?!」

しかし、何かに反応して突然立ち止まった。

「あいつ、まさか…………!?!」

「隊長!なぜ止まるんです!」

フアングロウの勢いは止まらない。

このまま放っておけばフアラデーとゾルに激突するのは誰の目にも明らかだった。

「ンンンンスパアアアアアキンツツツツツツツツ!!!」

その時、不思議なことが起こった。

フアラデーが突き出した拳から、突如電流が流れ出たのだ！

「BUWWWWWWWWWWNNNNNN!?!」

理屈では説明のつかないその力に、フアングロウもたまらず怯んだ。

「驚いたな……だが今は奴の始末が先だ」

そう言うのとコーデインは地面の割れ目に手を突っ込み、中から専用武器、“フラクチュア”を取り出した。

丸みを帯びた棍棒を片手に、敢然と立ち向かう。

それを目視したフアングロウは自慢の巨大な牙を振りかざした。

「ずあっ!」

すかさずコーデインもフラクチュアを振るう。

ゴキヤアという鈍い音が響き渡った直後、ズンツと大地に震動が走った。

フラクチュアは無傷。

そしてフアングロウの牙は……根元からへし折られていた。

地面にはさつきまで牙だったものが突き刺さっている。

「……!?!BUHHIIYAAAAA!?!」

口元から血液を滴らせながらファンングロウは泣き叫ぶ。すかさずコーデインはフラクチュアを槍投げ選手のようにファンングロウめがけて投げつけた。

鈍器は頭蓋骨に直撃。

支柱である牙を既に折られていたためか、その骨は脆かった。

「qawsedrftgyhujikolp;@:」

震動で脳を壊されたらしく、ファンングロウは断末魔のうめき声をあげながら息絶えたのだった。

「ふうっ……さて、と……」

コーデインは新人三人に目をやった。

今回の件で確信した。

この三人には特別な力があるのだ。

特殊な拳法を扱うロクシヨウ。

急激にパワーアップしたゾル。

そしてファラデーは自分と同じ能力者ときた。

(まさか今期の新人にはこのレベルの実力者がまだいるのか……?)

「隊長、リーダー、リバース獣の死亡確認ができました」

胸部のヴァイタルコア越しに、ビークルに残してきた非戦闘員の声があった。
「……………そうか。」

先が思いやられる。コーデインは内心そう呟くのだった。

第7話　　その男、驕慢につき

「全員揃ったので、本部に戻りましょう」

コーデイン、ファラデー、ロクシヨウ、ゾル。

ファングロウの討伐を終えた一行は、ビークルの中に戻っていた。

しかし、発射しようとした直前、警告音が響き渡った。

「緊急信号か……！発信源は!?」

慌てた様子のコーデインが確認をとる。

「C部隊からです！」

その言葉にファラデーが食いついた。

「C部隊……!?カスケードとテルミットがいるところだ！」

「ぐわっ……！」

大きな蛇のリバース獣、カーマ。

その尻尾に吹き飛ばされ、カスケードは岩壁に叩きつけられた。

衝撃で破れたスーツはたちまち修復されるが、繊維に覆われていない顔は打撲の痣が赤く腫れあがっていた。

「うあっ……くっ……こいつはかなり厳しいぞ」

その時、後方からビークルが飛んできて荒っぼく着陸。

中からフアラデーが血相変えて駆け出してきた。

「大丈夫かカスケード！ いったい何があったんだ！」

「フアラデー……俺はいい、それよりあいつの口元を見ろ！」

「……!? そんな……ッ!!」

フアラデーは衝撃のあまりその場に立ち尽くした。

カーマの口からはみ出ているものは……

「テルミットが……呑み込まれた!!」

女性の足だ。

C部隊に女性は1名しかいないはずだった。

既に上半身を呑まれたテルミットが懸命に足をばたつかせている。

「なんとということだ……」

「そういうことか」

コーディンとロクシヨウもビークルの中から出てきた。

「立てるか、カスケード」

「はい、まだなんとか」

「ならビークル内で応急処置をしてもらえ。俺達はこれから腹部に衝撃を与えてテル

ミットを吐き出させる」

そう言うや否や、コーディンは自身の専用武器フラクチュアを槍投げの如く投げ飛ばした。

ロクシヨウは前方に出て落ちてくるテルミットを受け止める体制に入っている。

しかし、カスケードの表情は晴れなかった。

「無理です！無理なんです!! 奴のあの表皮！脂肪ツ！俺達が奴を倒せなかった理由もそ

ここにある！」

次の瞬間、フラクチュアはカランと音を立てて地面に転げ落ちていた。

いや、確実にカーマの腹部に命中していた。それは間違いない。

しかし、カーマのゴムクッションのように分厚く柔軟性のある脂肪に弾き飛ばされてしまったのだ。

「隊長のフラクチュアが通らない!？」

ロクシヨウは予想外の事態に動揺した。

カーマの尻尾が再びしなり、ロクシヨウに襲い掛かった。

「っあっ！」

残像が見えるほどの超スピードで走ってきたコーディネインが尻尾にパンチで迎撃する。

その拳で一瞬静止した尻尾にロクシヨウも触れる、本部に戻りましょう」

コーディネイン、ファラデー、ロクシヨウ、ゾル。

フアングロウの討伐を終えた一行は、ピークルの中に戻っていた。

しかし、発射しようとした直前、警告音が響き渡った。

「緊急信号か……! 発信源は!？」

慌てた様子のコーディネインが確認をとる。

「C部隊からです！」

その言葉にフアラデーが食いついた。

「C部隊……!?!カスケードとテルミットがいるところだ!」

「ぐわっ……!」

大きな蛇のリバース獣、カーマ。

その尻尾に吹き飛ばされ、カスケードは岩壁に叩きつけられた。

衝撃で破れたスーツはたちまち修復されるが、繊維に覆われていない顔は打撲の痣が赤く腫れあがっていた。

「うあっ……くっ……こいつはかなり厳しいぞ」

その時、後方からビークルが飛んできて荒っぽく着陸。

中からフアラデーが血相変えて駆け出してきた。

「大丈夫かカスケード！ いったい何があったんだ！」

「フアラデー……俺はいい、それよりあいつの口元を見る！」

「……!? そんな……ッ!!」

フアラデーは衝撃のあまりその場に立ち尽くした。

カーマの口からはみ出ているものは……

「テルミットが……呑み込まれた!!」

女性の足だ。

C部隊に女性は1名しかいないはずだった。

既に上半身を呑まれたテルミットが懸命に足をばたつかせている。

「なんとということだ……」

「そういうことか」

コーディンとロクシヨウもビークルの中から出てきた。

「立てるか、カスケード」

「はい、まだなんとか」

「ならびークル内で応急処置をしてもらえ。俺達はこれから腹部に衝撃を与えてテルミットを吐き出させる」

そう言うや否や、コーデインは自身の専用武器フラクチュアを槍投げの如く投げ飛ばした。

ロクシヨウは前方に出て落ちてくるテルミットを受け止める体制に入っている。

しかし、カスケードの表情は晴れなかった。

「無理です！無理なんです!! 奴のあの表皮！脂肪ツ！俺達が奴を倒せなかった理由もそこにある！」

次の瞬間、フラクチュアはカランと音を立てて地面に転げ落ちていた。

いや、確実にカーマの腹部に命中していた。それは間違いない。

しかし、カーマのゴムクッションのように分厚く柔軟性のある脂肪に弾き飛ばされてしまったのだ。

「隊長のフラクチュアが通らない!?!」

ロクシヨウは予想外の事態に動揺した。

カーマの尻尾が再びしなり、ロクシヨウに襲い掛かった。

「っあっ！」

残像が見えるほどの超スピードで走ってきたコーデインが尻尾にパンチで迎撃する。

「くっ……い！」

コーデインは弾力にはじかれて飛ばされていったが、その打撃で一瞬遅くなった尻尾にロクシヨウも触れる。

”平林”!

攻撃の軌道を逸らせ、地面に叩きつけようという魂胆だ。

「うおっ!？」

しかし、叩きつけられたのはロクシヨウの方だった。

「うあああああッ!!こ、こいつの表皮……」滑る”!俺の拳法が、全く通らないっ!」
後方に吹き飛ばされたコーデインは、地面に着地し、前方を見た。

(直接触れてわかった……奴の脂肪には直接的な打撃はほとんど通らない!)

コーデインの専用武器フラクチュアは、彼の能力に合わせて開発されたものだ。

コーデインの能力。

それは”隙間に亜空間を作り出す”というもの。

かなり使い勝手の悪い能力だが、実戦経験を積む内にコーデインはある法則を見つけた。
た。

それは『手で直接でなく、自分が持っている棒などを触れさせても亜空間は発生する』
というものだ。

フラクチュアはその性質を利用した武器だ。

触れた相手に微細な震動を与えることで細胞の隙間を作り、そこに亜空間を作ることによって崩壊させる。

この武器により、リバース獣との戦いにおいてコーデインは最強になった。

しかし、今相對するカーマにはそれも通じない。

奴の脂肪はゴムまりのように柔らかく、隙間が生じる余地もない。

即ち、コーデインにとって相性最悪の敵というわけだ。

最強イコール無敵というわけではない。

「しかし……このままではテルミットとロクシヨウが！」

ロクシヨウはすり潰される胡麻のように地面にこすりつけられている。

テルミットの足ももうつま先しか見えなくなっている。

万事休すかと思われたその時。

「はあく……ダセエんだよオオオオお前らのやり方！隊長が下位種相手に手こずって、恥ずかしくないの？」

「何？」

声ができる方を振り返ると、そこには三白眼の戦闘員がいた。

「お前、確かヤコブとかいう新人か……お前こそただ見ているだけじゃあないのか？」

「ぐおおおおおおおおおおおっ!!」

カーマに投げられたロクシヨウがヤコブ達の前に飛ばされてきた。

ヤコブはしゃがみ込み、ロクシヨウの腕を掴んだ。

「すまん……俺はもうダメだ……」

「いや、まだまだ体張ってもらうぜ」

そう言うと、ヤコブは突然ロクシヨウの体を空中に投げ飛ばした!

「な……なにをッ!?!」

「戦えない戦造人間など、必要ない!」

「ロクシヨウ!? ヤコブ貴様ーッ! 何のつもりだ!!」

「慌てんなよ。戦いの役に立ってもらうだから……まあ見てな」

無防備なまま宙を舞うロクシヨウ。

それに反応したカーマは、ロクシヨウに食らいつこうと口を突き出した。

「!!」

しかし、突如カーマは動きを止め、苦しそうに唸り始めた。

目の前の獲物に夢中になるあまり、テルミットをのどに詰まらせてしまったらしい。

「よおし……これで討伐できる」

満足げな表情を浮かべるヤコブを見て、コーデインは複雑な心境だった。

今の行動によってカーマ打倒に近づいたのは確かだ。

しかし、そのために平気で仲間を犠牲にするそのスタンスに、前隊長ボイルの面影を感じずにはいられなかった。

「隊長！」

背後から聞こえたカスケードの声で、コーデインは現実には引き戻された。

カスケードと一緒にフアラデーも走ってきた。

「今、テルミットから連絡が入ったんです！」

「……！」

どうやらテルミットはカーマの喉元にうまいこと留まっているらしい。

つまり、テルミットはまだ再起不能ではないということだ。

「とどめは俺達にやらせてください！」

「何か策があるようだな。いいだろう」

カスケードは戦造人間専用銃『イレイザー』を腰のホルスターから取り出した。

イレイザーは、戦造人間の生命エネルギーを弾丸に変換して発射する装置だ。

大抵の戦造人間からは直接殴った方が強いという理由からあまり使われていないのだが、カスケードはこのイレイザーを愛用していた。

「俺の“弾”は、壁をすり抜ける」

そう呟くと、カーマに向けて弾丸を数発発射した。

弾はカスケードの宣言通り、カーマの首の肉をすり抜け、体内へと入っていった。

「~~~~~!?!」

途端にカーマが身をよじらせ、口からテルミットを吐き出した。

「おっと」

降ってきたテルミットの体を受け止めるカスケード。

「おい！今のは一体なんだ！何をやったんだよ！」

何が何だかわからないという様子でフアラデーが尋ねた。

「俺の弾は壁をすり抜けるってことはさつき言ったな？その弾をテルミットが蹴り飛ば

して体内の内臓に拡散したって寸法よ」

「ふううう……正直言ってかなり命の危険を感じたわ……かろうじて喉頭にしがみつ

けたけどね」

カーマが地面に倒れこんで痙攣し始めた。

「さっ、最後の一撃頼むぜフアラデー」

「お、おう！」

カーマの口が開いた瞬間。

「ンンンンンスパアアアアアキンツツツツツツツツツ!!!」

ファラデーの拳から電流がほとぼしり、カーマの口から全身に入り込んだ。

「H G O N N N N N N N N N N !」

声にならない悲鳴と共にカーマは息絶えたのだった。

喜ぶファラデー達を他所に、コーデインの表情は重いままだ。

(下位種の中でもかなり強い方だった……そろそろ下位種の数を抑えるのも限界か……?)

「ううう……」

ヤコブに投げ飛ばされたロクシヨウは遠い地面に落下していた。

「あの野郎……うつ……ひとまず戻らなくては……ハッ!?」

地べたを這うロクシヨウの目の前にいたのは、ゾルだった。

「ゾル……? お前、ピークル内で待機していたはずじゃ……」

「おいおい、酷い反応だな……俺はお前を迎えに来たんだぞ?」

ロクシヨウはゾルの本当の目的を薄々察していた。

ゾルは仲間を迎えに来るような男ではない。

「その前に、もう少し怪我してもらおう。再起不能になるぐらいにな!!」

ゾルは足を上げ、既に満身創痕なロクシヨウの背中を凄まじい力で踏みつけた。

「ぬあああああああああああああああああああああああツツツ!」

あまりの激痛にロクシヨウは失神してしまった。

「ふん、元非戦闘員の成り上がりがりやしやしやり出やがって……これではばらくは病棟から出られまい」

そう呟くと、ゾルはロクシヨウの体を引きずりながらピークルへ戻っていった。

第8話　くネクスト・ステージく

「あまり戦績が芳しくないね」

コーデインは上層部からの叱責を受けていた。

「申し訳ありません」

「専用武器まで持つておきながら下位種に傷一つ付けられないとは、戦造人間最強が聞いて呆れるよ……ボイルが生きていた頃の方がまだましだったんじゃないかね？」

「ッ……………」

「今後は気を付けるんだね、君の部下にだって有望株が結構いるんだから」

「……………」

コーデインは戦力部隊の隊長ではあるが、それでも経営上層部の人間には頭が上がる。ない。

いくら戦闘力が高くとも超えられない権力の壁があるというのが戦造人間の辛いところだ。

「じゃつ、二人の無事を祝って乾杯！」

「うん、ありがと」

「お前は無駄に元気だな……」

食堂でフアラデーがカスケードやテルミットと共に食事を共にしていた。

三人ともカーマとの戦いから帰還したばかりだ。

「奮発して多めに買ったんだけど、食うか？」

フアラデーが蛇の天ぷらを一つテルミットに差し出した。

もちろんリバース獣ではないごく普通の蛇の肉だ。

「いや蛇はちよつと……さつき食べられかけたばっかりだし」

「お前、デリカシーつてもんはねーのかよエエ？」

カスケードがフアラデーを睨む。

「別にいいじゃんか終わったんだから。食うつてことは勝利したつてことなんだぞお

「？」

そう嘯くと、フアラデーは何食わぬ顔で蛇の天ぶらにかじりついた。

「ところでさカスケード、お前の貫通弾も俺の電気みたいな能力なのか？」

「ちげーよ、俺のは地道な訓練で編み出した純然たる技だ！」

「じゃあ俺にもできるかもしれないのか？」

「オイオイオイ止めろって……俺のアイデンティテがイ薄れるだろうが」

「そうそう！そんな簡単に出来ることじゃないんだからねっ！」

三人はいつもの調子で語り合うのだった。

「うう……ひどい目にあつたぜ」

病棟では、ロクシヨウが非戦闘員に看護されていた。

元々ロクシヨウも非戦闘員だった。

彼ら彼女らとは元同僚同士ということになる。

「大丈夫？」

「大体なんで戦闘員になつてなつたわけ？適性検査の時も嫌がつてたじゃない」

「いやさ、なんだかんだ言つて戦闘員の方が給与いいわけよ。それに俺には相手の攻撃を受け流す特殊な拳法があるから何とかなるかなつて」

最上位種のリクイダスは既に前隊長ポイルに倒され、現在の隊長は最強と名高いコー
デイン。

リバース獣との不毛な戦いも自分たちの代で終わる。

ロクシヨウはそう睨んでいた。

そして戦いが終わった後の老後を見据えて行動していたというわけだ。

「でも考えが甘かつたつてわけね」

「戦造人間が皆好戦的なわけじゃないんだぞ？出来る限り楽な暮らしがしたいだけなんだよ俺は。『余計な苦勞は買つてでも避ける』、それが俺の人生哲学だったのにあの野郎のせいで俺は……」

「ヤコブって野郎か？」

ヤコブの事は非戦闘員の間で話題になっていた。

非戦闘員の情報ネットワークには目を見張るものがある。

多くの戦闘員を日々見守り、些細な変化を感じ取るエキスパートなのだから。

戦力部隊の調和をかき乱す荒くれ者は格好のスキヤンダルだった。

「いや、違う。あついや違わない。違わないけど違うヤコブに投げられたのは本当だけど直接攻撃してきたのは」

「何？じゃあ一体誰がこんなことを」

「……言つたら今度こそ殺されるから言わねー」

この時、ロクシヨウはまだ知らなかった。

残酷な運命が近づいてきているということに。

「ロクシヨウをやったのはお前か？」

人気を避けた廊下に、ただならぬ雰囲気の二人の男が立っていた。

ヤコブとゾルだ。

「なんだその言い草は？最初に奴を放り投げたのはお前じゃあないか。責任転嫁はよせ」

「そんなんじゃねえよ。戦闘員はリバーズ獣を駆逐するための存在。多少怪我したって全部自己責任ってもんさ」

「じゃあ何故こんなところに俺を呼び出した？」

「感じたんだよ、俺と同じ匂いをあんたから……何ならあんたの計画に一枚かんでもいいぜ？」

「……ほう？」

ゾルに促され、ヤコブは戦造人間の存在意義に抵触する言葉を言い放った。「この組織は腐っている。だから……」

その時、ヤコブの台詞を遮るかのように緊急サイレンが鳴り響いた。

戦造人間への招集命令だ。

「チイツ……続きはまた次の機会にしよう」

「そうだな」

二人は別々に散らばり、待機位置に向かっていった。

「クソっ、蛇の次はトカゲかよーしかもこんなに沢山!!」

コーデイン、フアラデー、カスケード、テルミットの4名の前には、トカゲのリバー
ス獣が複数匹群がっていた。

しかし、今までのリバーズ獣とは異なり普通のトカゲと変わらないサイズだ。

「痛てえっ!」

見るとフアラデーの足に数匹のトカゲが噛みついていた。

戦造人間共通装備の特殊繊維を貫いて皮膚に達するのだからかなり鋭利な歯である
ことは間違いない。

「ええいつ消え失せろ!!ちやあああああああああああああ!!」

ぐっと気合を込めると足から電流が迸り、トカゲ達を焼き尽くした。

「やるぞテルミット!」

「うん!」

カスケードが宙に向かってエネルギー弾を放ち、空中に飛び上がったテルミットがそ
れにオーバーヘッドキックを食らわせた。

すると一つだった弾が複数個に分裂し、大量に群がるトカゲ達を一度に焼き払った。

「フンッ!」

コーデインがフラクチュアを一振りすると、そこから生じた風圧だけでトカゲ達の体

は消し飛ばされる。

(こいつら、下位種にしては小さすぎる……まさか!?)

一通り片付いたタイミングで突如ビークルから通信が入った。

「どうした?」

「たつ、助けて……うわあああああ!?!」

激しい衝撃音と共に通信が途絶えた。

「!!」

その場にいた全員に緊張が走る。

「馬鹿なツ!?!リバース獣っていったら大抵は暴れることしか考えてないようなやつなんじゃないのか?それなのに、俺達ではなくビークルを直接狙いやがっただ!?!」

カスケードの言う通り、下位種がビークルが直接狙うなどということは普通なら考えられないことだった。

「……!?!フアラデー!後ろから何か来るっ!!」

テルミットに指摘され、フアラデーが振り返ったその先にいたのは、大きな(と言ってもこれまでのリバース獣に比べれば小さい。精々乗用車ぐらいか)トカゲが迫ってきていた。

「うおいつの間!?!」

「ちくしよおおおおおおおおおおお！なめんじやあねええええええ！」

頭に血が上がったフアラデーは再び電気攻撃の構えに入った。

「よせツフアラデー!!」

「だああああああああああああああああ!!」

「……………プツ」

突き上げた腕から電流が放たれると同時に、大トカゲは口から何やら液体を放った。

それが触れた瞬間、電機は炎に変わり、フアラデーの全身に襲い掛かった。

「なにツウワアアアああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

全身炎に包まれたフアラデーは、もがき苦しみ、地面をのたうち回ることしかできなかった。

「……………マズハ一人」

その時、不思議なことが起こった。

大トカゲの口から、片言ではあるものの人間の言葉が発せられたからだ。

「遂に出てきたか……………上位種ツ!!」

戦力部隊は今、新たな窮地に立たされようとしていた。

第9話 〈生存抗争〉

「うわああああああああああああああ!!」

「止むを得ん……おい！」

炎に包まれるのたうち回るファラデーにコーデインが全身を覆い被せた。

「ううっ……くっ……」

最初のうちこそ炎の熱に苦しむも、やがて炎は完全に鎮火した。

コーデインの能力は隙間に亜空間を生み出すこと。

密着することで隙間を二人の間に隙間が出来、そこに炎を吸い込んだのだ。

「うう……」

しかし、もうファラデーは戦える状態では無かった。

「なんて野郎だ……強い！」

「私ハ引火性ノアル体液ヲ出セルノダ」

大トカゲが人間の言葉で説明してみせた。

「……やはりお前は上位種のスタクレアだな」

「ソレハオ前達ガ勝手付ケタ種族名ダ……私ニハ”アム”トイウ名前ガアル。”イー

ヴァ" トイウ仲間モイル」

「ボイルの代に皆殺しにされたとノギさんから聞いていたが、生き残りがいたというわけか……」

コーデインが独白する。

「ボイル……奴ノ空気ヲ操ル能力ハ非常ニ厄介ナモノダツタ……ダガ奴ハモウ死ンダノダロウ? ソウイウコトナラ私達ノ方ガ有利トイウモノダ」

「ッ……」

「治療ガ必要ダロウ? ソイツヲ連レテ帰ツテモイイゾ。ソノ代ワリ、明日モココニ来イ。二人デナ」

「何……? どういうつもりだ」

「我々ノ間デ" 決闘" ヲスル!" 生存抗争" ダツツツ!!」

「決闘?!」

一同は戦慄した。リバース獣が決闘を申し込んでくるなど前代未聞だ。

「必ず来イ! 時刻ハ16時ピツタリ! 来ナケレバ民間人ノ街ニ侵攻スル!!」

「決闘うゝ? ふざけたことぬかすんじゃあねえぞ! 今ここでお前を仕留める方が早いに決まっつてんだろうがこのダボが!」

「カスケード!!」

「……………」

コーデインに制され、カスケードは黙った。

「もし今ここでこいつを倒せたとしても、もう一匹が動く！ そうなれば大勢の民間人の命が奪われることになるんだぞ！」

「そんな……………」

「だからこそ、乗らねばならない！ 奴の言う“決闘”に!!」

「くつ……………」

フアラデーを運び込み終わると同時にピークルは本部へと急発進した。

「才前達ハ必ず我々ガ仕留メル……………！ 今度ハ我々ガ才前達ヲ狩ル番ダ!!」

「上位種か……………決闘を強要するとは舐めた真似を」

「電気の能力のフアラデーがあっさりやられた……………俺の言う通りになったろう？」

本部の人目のつかない廊下で、コーデイン達とは違うエリアに発生した小トカゲの殲滅を終えたゾルとヤコブが立ち話をしていた。

「能力者が二人いるにも関わらずたった一匹相手に手も足も出ない、これが戦力部隊の現状さ。要するに今の戦闘員派遣制度はダメダメってわけさ。こいつはトップから叩

き直さんとなア」

「ふん、随分と大口を叩くじゃあないか。鼻つまみ者に過ぎないお前にそんなことが出来るとは思えんが？」

「出来るさ。何しろ俺はコレだからな……」

ゾルの挑発を受け、ヤコブは自分のヴァイタルコアを外し、自らの胴体を露出させた。

「……何だ?!?お前まさか……」

“ソレ”を見て思わず驚愕したゾルを見て、ヤコブは不敵な笑みを浮かべるのだった。

時同じくして、戦力部隊隊長コーデインと顧問ノギもまた対談をしていた。

「例の武器、完成はしたのだが……」

「そうですね……」

トランクケースの中に入っていたのは戦造人間専用武器、“イレイザー”のような物だった。

しかし、状来の物とは違い、側面に黄金のラインが施されている。

「しばらくの間フアラデーは再起不能……代わりに俺が持つておきます」

「馬鹿なことを言うんじゃない！これは“彼だけしか使わない”ことを考慮して作られているということを忘れたか!!」

「わかつてますって……使わずに勝利できるよう努めますよ」

そう言うと、コーデインは銃を手に取り、机の中の亜空間にしまった。

「それと、トランスを呼んできてもらえますか？」

「トランス……少し問題がある彼女を……？まさか」

「ええ……彼女を明日の決闘に出場させます」

戦闘員用の個室の一つの隅で、一人の女性がしゃがみ込んでいた。

彼女こそがトランス。彼女の隠された能力はコーデインのみが知っている。

病棟のベッドで、一人の男が呟いた。

「このままじゃ終われねえ……もつと強くなりたい！」

彼の心に流れる電流は、まだ止まってはいなかった。

翌日16時。

先日と同じ場所で、二匹の大トカゲ、〃スタクレア〃が待機していた。

「……来タナ」

スタクレアの内一匹の目線の先には着地したビークルから降りてくる男女二人組の姿があった。

コーデインとトランスだ。

「2対2の決闘。約束通り受けてやろう」

「ベリーウエル!! サア、始メヨウカ!!」 生存抗争” ヲツ!”
戦造人間とスタクレアの戦いの幕が今開けられた。

第10話　くアクトレスと諸刃の拳銃く

「約束通り、二人で来たぞ！」

「約束ヲ守ツタ事ニハ礼ヲ言オウ」

「ダガ悲シイカナ、結局人類ガ滅ビルトイウ結末ハ変ワラナイガネ」

アムと一緒にいるもう一匹のスタクレアが荒々しい口調で挑発した。

「自己紹介ガ遅レタナ。俺ノ名ハイーヴア」

「成程、そちらも二人いるというわけだな」

「戦えるか、トランス」

「えっ……はっ、はい……！」

トランスと呼ばれた女性は、弱々しく返事をした。

本部に残された戦造人間達の間にも緊張が走っていた。

「あのトランスという女は何者なんだ？ いったい何故奴が代表に選ばれたというんだ」
「隊長さんには何か考えがあるんだろうよ」

ゾルとヤコブの会話を尻に、ノギは窓の外に目をやった。

（頼んだぞ……コーデイン。そしてトランス……）

「シャアツツ！」

アムの尻尾が地面を鳴らすと同時に、イーヴァがコーデイン目掛けて飛び出した。

「来るか……」

コーデインは身を引いてそれをかわし、地割れに手を突っ込んで中からフラクチュアを取り出すと同時に空中へ飛び上がる。

「ずあああああああああああああああああつ！」

「ウウツ！」

がら空きになったイーヴァの背中に落下の勢いと共に打撃を加える。

更に着地してすぐ足払いで前足を崩し、顔面にフラクチュアを叩きこむ。

吹き飛んだイーヴアに追い打ちをかけようとするコーデイン。

しかし、アムが横から現れ、コーデインの行く手を塞いだ。

「私ガイルコトヲ忘レルナヨ」

アムの後ろ足による強烈な蹴りを、コーデインはただ受け止めることしか出来なかった。

「ならばこれはどうだ！」

コーデインはありったけの力を込めてフラクチュアを振り下ろした。

しかし、その一太刀はアムの尻尾によって掴まれ、ピクリとも動かなくなってしまった。

「何……ッ!？」

「白羽取りィ……！オ前ノ動キノパターンハ既ニ見切ツタ……フラクチュアハ最早通用センゾ!!」

（成長のスピードが想像以上に速い……！）こうなれば、こいつを使うしかない……！

「ホラホラドウシタア？オ前ソレデモ戦造人間カヨ！」

「うううっ……！」

いつの間にかイーヴアの尻尾がトランスの首に巻きついていた。

今にも首の骨が折れてしまいそうだ。

「トランス……ぐおおっ！」

「自分ノ心配ヲスルベキダロウ？」

コーデインは岩壁に叩きつけられた。

両手でフラクチュアを抑えてはいるが、押し負けないよう堪えているだけで精一杯だ。

「……トランスッ！あの技を使えッッッッッッッ！」

「隊……長……！」

「今、人類の未来は俺達二人にかかっているんだ！だがこのままでは全滅しちまうぞッ
!!」

「私には……もう何も……」

「いいや違うねッ！お前は既に持っている！この状況を打破する確固たる希望の種を
!!」

「イーヤ駄目だね！才前ハ直ニ息絶エルノダカラナア！血反吐ブチマケナア！」

イーヴァは無慈悲にも力を強める。

しかし次の瞬間、予想外なことが起こった。

「……おおおおおおおっ！」

「グヌッ!?馬鹿ナ!？」

トランスが恐るべき力でイーヴアの尻尾を振りほどいたのだ。

「このまま死ぬくらいなら……私のこの技、使わせてもらおうぜっ!」

「!?!」

イーヴアは目を疑った。

目の前に立っている女性が、先ほどまで自分と戦っていた相手と同一人物には見えなかったのだ。

目は吊り上がり、自信ありげな笑みを浮かべている。

口調も心なしか男性に近いものとなっている。

そこには最初の弱気な印象は微塵も見受けられなかった。

「はあっ!」

「グアツ!?!」

一撃でイーヴアを吹き飛ばし、すぐさまアム目掛けて突撃した。

「コノ女、先程トハマルデ別人!?! 一体ドウイウワケダ!!」

「やかましいっ!」

アムの尻尾を掴み、砲丸投げのように勢いよく放り投げた。

「助かっ……」

「おおっと待てよ!しばらく黙っててくれ!今俺はコーデインになってるつもりなんだ

ぜ？本物の存在を意識したくない！」

「……ああ」

トランスが豹変した理由、それは強烈な「自己暗示」だ。

自分がコーデインになったと思いい込むことによつて、その動きと強さを疑似的に再現するという寸法だ。

「いや、ちよつと……ふうう……もうこれ以上持ちません……」

コーデインをトランスは急に倒れ伏した。

自己暗示には膨大な精神エネルギーを消費する。

肉体に影響を与えたとなれば尚更だ。

「ありがとう、トランス」

トランスの体をゆっくり横たえると、コーデインは二匹のスタクレアを睨め付けた。

「G U O O O O O O O O W N !! オノレエエエエエ！調子二乗ルンジャアナイゾ戦造人間ンンンン!!」

「慌テルナイヴァ、マダ我々が優勢デアルコト二変ワリハナイ」

二匹はまだ余力を残していた。

二対一。圧倒的に不利な状況だ。

トランスのお陰で窮地を脱したは良いものの、このままでは再び追い詰められてしま

うだろう。

(こいつを使うしかないか……)

二匹が突撃を開始した瞬間に、コーデインは左手で服を握りしわを作った。

アムのかぎ爪を右手のフラクチュアで受け止め、力を込めて左に押す。

そうすることによりイーヴァがアムの真後ろに来ることになる。

「フン、盾ニシタツモリカ？何モ考エズ衝突スルホド鈍クハナイワ!!」

そのまま行くと直撃するため、イーヴァはアムを避けて横に曲がろうとした。

しかし、もう遅い。

既にコーデインの狙い通りの展開になっていた。

「いや？別にそんなつもりじゃあないさ……俺の狙いはあくまでこの“位置”だ」

コーデインは、服のしわによって生じた“隙間”から左手を出す。

そこには黄金の装飾が施された“拳銃”が握られていた。

「!?シマツ……」

アムは慌てて逃れようとしたが、それよりもコーデインが引き金を引いた。

『Error』

瞬間、銃口から凄まじいエネルギー波が放たれ、野を放射状に焼き払った。

「ぐっ、うおああああああああああああああああああああ……!!」

コーデインは苦し気に右手のフラクチュアで左手の銃を叩き落とす。

銃がコーデインの手から離れた途端にエネルギー噴射は止まった。

「はあっ、はあっ、はあっ」

荒々しく息を吐くコーデインの前に、イーヴアが立ちふさがった。

「ヤラレタゼ……マサカソク新武器ヲ持ッテイタトハナ……負けヲ認メルヨ」

後方でアムがイーヴアは既に虫の息。戦う力は残っていないようだ。

「ダガナ！忠告シテオクゼ……他ノ上位種ガ皆我々ミタイニ正々堂々ト勝負ヲ挑ンデク

ルワケジャアネエ……今後才前ラハ狙ワレルコトニナルゼ？用心スルンダ……ナ……」

そう言い残すと、イーヴアは息絶えた。

「うーん……」

それとすれ違うように、トランスが目を覚ました。

「えっと……あつ隊長……すみません、私、途中で気絶なんかしちゃって……!?!」

トランスは思わず謝罪の言葉を止めた

コーデインの左腕が、ミイラのように干からびていたのだから。

第11話　　く水と油と蟲の群れく

「この前出てきた上位種に隊長が使ってた新武器って、あれはいつたいたいという仕組みなの？」

基地のトレーニング室。

そこではカスケードとテルミットが世間話を繰り広げていた。

テルミットはレッグプレス、カスケードはラットプルダウンを行っている。

「いや、多分ありや俺たちが普段使ってるイレイザーの強化版だろうな。リミッターを外したって感じか」

カスケードの推察は当たっていた。

“イレイザー”。それは戦造人間が使う特殊な拳銃。

その実態は使用者の生命エネルギーを弾丸に変えて打ち出す装置だ。

その出力を高めたものが“ツヴァイレイザー”である。

しかし、ツヴァイレイザーは強すぎた。

開発時に想定されたある人物以外の者が使用すると、エラーを起こして膨大な破壊力と引き換えに精力を際限なく吸い取ってしまうのだ。

「隊長が復帰するまでの一週間、オレ達が前線に出ないとなあ」

「!？」

声のした方を見ると、そこにはランニングマシンで走るファラデーの姿があった。

「えっ、ファラデー!?!なんで!?!入院してたはずじゃ!」

「緊急度測定が4下回ったからさ、こっそり病室抜け出てきたんだよ。三日間ずっと寝たきりだったから、体動かさないとな!」

緊急度測定とは、戦造人間の負傷度合いを測る数値である。

1から10まであり、7を上回った戦闘員は絶対安静を課せられる。

この制度には、たとえば隊長であっても逆らうことは出来ない。

「とにかく、今日から復帰することにしたから」

「いやいやダメでしょ!まだ退院許可は出てないのに勝手に出てきちゃ!!」

「別にいいだろそれぐらい、もうどこも痛んでないぜ」

未来のエースは、あっけらかんとしているのだった。

4人の戦闘員に招集がかかった。

リバス獣が出現したのだ。

リーダーによると敵は各地に散らばっているようなので、二人ずつで分かれることとなった。

ヤコブは、自分のペアになる男に声をかけた。

「よお、お前さん復帰してたのか」

コーデインと入れ違いで戦線復帰した男が一人いる。

ロクシヨウだ。

「……」

「……なんだよ、まさかまだ根に持つてゐるってわけじゃあねえだろうな」

「当たり前だろ。俺はお前らに殺されかけたんだぞ?」

そう、ロクシヨウは一度ヤコブに放り投げられた。

もつともその後直接止めを刺したのはヤコブではなくゾルなのだが。

「大げさだなア、あの場面ではああするのが一番手っ取り早かったんだ。俺の近くに都合よく転がってきたお前が悪いんだぜ?」

「お前ら、二人で結託して何を企んでいる?」

「何のことやら?そんなことよりこれから戦う敵に集中しろよ」

目標地点にいたのは、小さい虫だった。

普通の虫よりはいくらか大きいのが、それでも精々電子レンジ程の大きさしかない。

「おいおい、なんだこいつはたまげたな……小さい虫けらじゃあねえか。これぐらいなら簡単に始末できるな」

その虫が体当たりをかましてきたが、ロクシヨウはそれを片手であしらい地面に落下させた。

「拍子抜けにも程があるな！これじゃあ病み上がりのウォーミングアップにもなりやしないようだ！」

地面に転がった虫は、体を小刻みに震わせている。

そしてしばらく震えた後に、先ほどよりも強い速度で突進を仕掛けてきた。

「むう！来るか……しかしッ！」

瞬間、ヤコブの腕が虫を叩き落としていた。

「最後の馬鹿力つてところだろうが、残念だったな。俺は機械のように精密な動きをす………相手が悪かったってわけ」

虫は地面にへばりついたまま動かなくなっていた。

「こっちは今終わった。死体を回収しに来てくれ」

その後、駆け付けた解析班員によって死亡確認がとられ、遺体はビークル内に運び込

まれた。

別の地点で沢山の虫と戦った後のカスケードとテルミットと合流し、一同は基地に帰還することにした。

しばし機内に気まずい沈黙が流れる。

以前のカーマ戦でトラブルが起きた時と全く同じ面子だったからだ。

「お、ロクシヨウのそこのは赤色なんだな」

気まずさを破るためか、カスケードが話題を振った。

「ん？そういうええ色が違うな」

カスケード達が狩った虫達の体表は緑色。

それに対してロクシヨウ達が狩った一匹の虫の色は赤で、心なしか他の個体よりもサイズが大きい気がした。

「群れのリーダーだったのか？はぐれたのが運の尽きだったかな」

しかし、ビークルが基地の近くまで進んだその時、ロクシヨウは異変に気が付いた。死んでいたはずの虫達が特殊ケースを突き破って飛び出してきたのだ！

「なっ………何イーーーーッ?!?おい！操縦席から離れるーーーーッ」

「えっ………うわああああアアアッ!!」

ビークルを操縦していた非戦闘員に赤い虫が突進し、左腕を吹き飛ばした。

「痛でええええええ！馬鹿な！確かに死んでいたはずなのに……息を吹き返したというのかー！？」

カスケードはイレイザーを構え、銃弾を乱射した。

しかし、一発も当たらない。

各々の虫達が素早い動きで弾を避けるのだ。

「スットロイゼエエエ拳銃使イ！」

「喋った……こいつ上位種か!!」

大抵のリバーズ獣は破壊衝動に支配されているが、言葉を話すほどの知能を持つ者が一部いる。

それが上位種なのだ。

「俺達ノ名ハ、ヴァーミン!!才前ラ乗り物ニ乗ルトコロヲ待ツテタゼエー!」

「ああっ!？」

テルミットが悲鳴を上げた。

先ほど攻撃を受けた運転手の顔がどろどろに溶けていたのだ。

「ヴァアアアアアアアアアカ共メ！俺達ハワザトヤラレテタンダヨオ！体液ヲ分泌サセルタメニナア!!」

そう言うのと、ヴァーミンはウジュールウジュールと音を立てながら液体を垂れ流している

な……俺がこいつを始末する」

揺れる機体の中でも安定して歩ける脚を持ったテルミットが先に操縦席につき、ロクシヨウは本部へ報告を行った。

一同は基地付近の岩山に緊急不時着し、外に出た。

「大丈夫カスケード？しつかりして!!」

「くう……」

カスケードの体を肩で支えながら運び出すテルミット。

「密閉空間カラ逃レタダケデ勝テルトデモ思ツテンノカア？コノドグサレドモガアアアアッ！」

「おーい！大丈夫かお前らー！」

「!？」

聞き覚えのありすぎるやかましい声が近づいてくる。

フアラデーだ。

「ちよつとあんた何してんの!？」

「何とはなんだ、助太刀しに来たんだよ！カスケード、怪我してんだろ？お前が付きつきりで守ってやれよ、俺に任せてき」

「マタ一人無駄死ニシニ来タカ……」

「三人か……丁度いい、俺が本体を叩く。お前らはその他大勢をどうにかしろ」
「……勝手にしろ！」

言うが早いかロクシヨウが緑ヴァーミンの群れに突っ込んでいった。

ヤコブがその後につき、ファラデーはその場にとどまる。

虫達は獲物のロクシヨウに突進していくが、独自の拳法によって勢いを殺され後ろに飛ばされる。

ロクシヨウがヤコブの道を開け、ファラデーがその後始末をするという寸法だ。

「他ノ奴ヲ分散サセテ本体デアル俺ダケヲ狙オウトイウノカ！ダガ、俺ニ攻撃ヲ当てルコトハ絶対ニ出来ン!!」

赤ヴァーミンは素早い体当たりでヤコブの足をへし折った。

「ぐうっ?!」

正面から地面に倒れ伏すヤコブ。

「足ヲ封ジテヤツタゼ！コレデモウテメエハ無力!!終ワツターーーーッッッッッ
!!」

ヴァーミンは、ヤコブの顔に酸を浴びせようとした。

しかし、それは叶わなかった。

ヤコブの手がヴァーミンの背中を鷲掴みにしていたのだから。

ブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラ
ブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラ
ブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラ
ブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラ
ブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラブラ

赤ヴァーミンの体は木っ端みじんになった。

「……思い知ったか、このダボが」

そう吐き捨てると、ヤコブは足の関節を無理やり曲げて直してみせた。

その時、闘いの終わりを告げるかのような小さい軋む音がしたのだった。

「ロクシヨウ！後は俺に任せてくれ！新技がある!!」

「何だと?」

「……ふんっ!」

その時、不思議なことが起こった。

「ファラデーの体から漏れ出ている電流が火を噴いたのだ。

「痺れるこのスパーク！燃え上がるほどにヒート！STAGE2！見参！」

「STAGE2？じゃあ今までのSTAGE1か？」

「あ、そういえば今まで名前なんて無かったよな……じゃあさ、能力に名前つけようぜ！」

「やつとる場合か、早く行け！」

「そうはいかない。名前がある方がちよつとカッコいいからさ……よし」

ロクシヨウは内心呆れた。

闘いの真つ最中だというのに油断しすぎだ。

「……名づけて、ライディーンSTAGE2!!今までのライディーンSTAGE1と
いうことにしてくれ！」

「GSYAAA
!!」

当然、敵が待つてくれているはずもない。

しかし。

「ふつ、はあつ！」

10匹。

「おらおらあつ！」

30匹。

「ずああつ!!」

60匹。

「これで……どうだあああああつ!!」

100匹。

瞬く間に全ての緑ヴァーミンを葬り去ってしまった。

「凄まじいパワーだなお前……」

「へっへーん、だろう?」

しかし、ロクシヨウはどこか違和感を感じていた。

上位種の癖にあまりにもあっけなすぎではないか?

今度は燃えて灰になっているため、確実に死んでいるのだが……

(あんまり会いたくないが、このことは直接隊長に報告した方がいいかな……)

「終わったみたいね」

声の主はテルミット。

何やら不機嫌そうな顔をしている。

「早く帰るわよ、ファラデー。あんたのこと、隊長に伝えておくから」

「ええっそんな!?! 勘弁してくれよ!!」

敵を制して基地に帰還する4人。

しかし、ファラデー達3人は気が付いていなかった。

テルミットの口周りに怪しい灰が付着していたことを。

第12話 アンレスト

「急に呼び出したりしてごめんねトランス。ちよつとこれからする質問に答えてほしいんだけど」

「?!」

虫のリバース獣、ヴァーミンとの戦いから30分も経たない内に、テルミットはトランスを基地の隅に呼び出していた。

トランスは不安を感じていた。

元々人付き合いが好きではない性格だが、それだけではない。

テルミットから、いつもとは違う異様な雰囲気を感じ取っていたのだ。

「この前トカゲのリバース獣と戦ってたの、あれって貴女よね? 記録映像を見たけど今とはまるで別人みたいだわ」

「うん……ああやって別人みたいにならないと上手く戦えなくて……」

「いや別に……強そうだって思ってたね……だから!」

「!?!」

突如、トランスの腹部に激痛が走る。

至近距離からテルミットが蹴りを食らわせてきたのだ。

「どう……………して……………」

口から血を垂れ流し、トランスは倒れ伏した。

「……………まずは一人」

そう言うのと、テルミットは口角を歪ませた。

まるで凶悪なりバース獣のように。

「こんなところでこそこそと何やってんのヤコブちゃん？」

そこはヤコブの部屋のに秘かに設けられた地下室だった。

「テルミット? どうしてここに来やがった?」

「さあ? 機械のくせして戦造人間の一人ぶってる奴の顔が見たくなっただけよ」

「何だと!? そこまで知ってるとは、てめえ……………本当にテルミットか!」

「気づくのが遅いんだよとんちき! そうとも私はテルミットじゃない。この前あんたにぶつ叩かれたりバース獣、ヴァーミンだよ! 実力未知数で危険なトランスの次は真っ先

にあんたをぶち殺してやると決めておったわ!!」

「他人の体に乗っ取っているからといってこの俺が手加減するとも思っていたのか？
まとめて消してやるッ!!」

しかし、ヤコブの攻撃は外れた。

「何イイイイイ!!」

「潰される寸前にあんたの素性はわかった……あんたの体は機械で出来ている!!」

「!!」

凄まじい力で腕を吹き飛ばす。

その断面には、通常の戦造人間には絶対にならないはずの機械配線がむき出しになっていた。

「そしてその回線部を出してしまえば……後は言わなくてもわかるわよね？」

「そんな……止めろ貴様まさか！」

ヴァーミンは神経回線にカッターを突っ込み、力任せにかき回した。

「ぐおああああああああ!!」

「精巧な機械ね！痛みもしつかりと感じるとは滑稽だぜ!!」

あまりの激痛に、ヤコブの意識は途切れようとしていた。

（俺は……ここで終わるのか？計画の準備も終わっていないのに……こんなカス

なんぞに……ッ)

「ぐっ!？」

ヴァーミンの攻撃が止んだ。

横から乱入してきたゾルに吹き飛ばされたのだ。

「虫けらがいい気になるんじゃあない……!？」

「ちい……2対1はちとキツイわね」

形勢不利を確信したヴァーミンは部屋からそそくさと立ち去った。

「逃がすか貴様ああああああああああ!!」

「待て!？」

「あの野郎をぶちのめさんことには気が済まん……!それを抑えろというのかッ!!」

「目先のことだけに囚われるんじゃあない!その配線を公の目にさらすことになっても

いいのか?」

「ッ……!？」

その一言でヤコブは冷静さを取り戻した。

ヤコブの正体は10年前に生産終了したはずの戦闘用アンドロイド。

しかし、とある理由でヤコブはその事実を隠し通してきた。

今部屋を出れば、他の職員にそれが露見してしまう。

それだけは絶対に避けなければならない。

「さっさと腕を拾え。直してやる。下準備の続きもあるしな」

「すまねえゾル……本当に助かった」

そう言うヤコブの表情は、心なしか嬉しそうだった。

「見舞いに来てあげたわよ……カスケードオオオオオオオん」

「……」

続いてヴァーミンが向かったのは、脳震盪のために病室に搬送されたカスケードの部屋だった。

今はベッドで寝ているが、すでに回復しつつある。

そうなる前に楽に始末しておこうという魂胆だ。

「どうしたの？折角来てあげたのにつれないのねえ」

「いやお前、普段俺が怪我しても見舞いになんて来ないじゃあないか」

「そんなひどいこと言わないでよね、こちとら用があつてきたんだからッ」

「ぐふっ!？」

テルミットの本気の蹴りを胸部に食らい、カスケードは吐血した。

あまりにも突然だったのでガードすることすら出来なかった。

「きやあああああーっ!?!テルミットさん一体何をしています!?!」

たまたまちようど入室してきた看護師が惨状を目の当たりにして悲鳴を上げた。

「うっさいわねえあんた……そんな大声で叫んだら殺されても文句言えねえよなア!」

しかし、病室から出ようとしたテルミットの背中に衝撃が走る。

カスケードが銃弾を放っていたのだ。

「何ッ!?!今の蹴りを食らって生きてるなんて……!?!」

「こういうことだろうと思つて銃を懐に入れてたんでな!はあっ!」

看護師が逃げた事を確認し、カスケードはテルミットに突撃しながら発砲した。

「フン! いい気になつてんじゃあないわよ! アタシのこの体はあんたの銃弾を蹴り返せるといふことを忘れたかい!」

その言葉通り、カスケードの銃弾はことごとく跳ね返される。

だがカスケードはそれらの一つ一つを涼しい顔でかわしていった。

「いい気になってんのはそっちの方だけ！俺がどれだけ長い間テルミットとペアを組んでたと思ってる！蹴り方やそれによる軌道、大体把握している！」

カスケードはテルミットの足が当たらないギリギリの範囲を攻めることで有利に立ち回った。

そしてヴァーミンを壁に叩きつけ、胸に拳銃を押し付ける。

「これでお前は終わりだ、観念しな」

「そんなことあなたに出来るの？あんたなんかにはパートナーの胸を吹っ飛ばす覚悟があるとしてもいいのかよおおこの腐れインポ野郎がああ〜ッ!!」

「……」

最愛のパートナーの口から放たれた罵倒にも、カスケードは動じなかった。

目の焦点はぶれておらず、呼吸の乱れも止まっている。

逆にビビリ上がったのはヴァーミンの方だった。

(☒)コノ男、本気だ……マジニ俺ヲコノ体ゴト始末シヨウトシテイル……！)

このままテルミットの体が致命傷を負えば、それを憑代にしているヴァーミンもただでは済まない。

(……ダガソレガイイ)

カスケードの指が引き金にかかった瞬間、テルミットの口から黒い粉のようなものが

吹き出した。

それこそがヴァーミンの本体。

そしてテルミットから抜け出たヴァーミンはカスケードの口から体内に入り込む。

宿主の乗り換えだ。

「……………えっ」

テルミットが正気を取り戻した。

その顔には先ほどまでの殺気はなく、代わりに恐怖だけがあった。

乗っ取られている間の記憶がないまま、気が付いたら胸に銃口を突き付けられてたのだから無理もない。

ヴァーミンはカスケードの体で醜い笑みを浮かべてこう言い放った。

「今までありがとうな」

引き金が引かれ、テルミットは吹き飛び、壁に激突した。

「う……………!」

大ダメージだ。もはや反撃する力など残っていない。

それどころか、口を動かすことすらままならないようだ。

「おいカスケード!大丈夫か!?テルミットがこないだの虫に乗っ取られたって?!」

慌てた様子の子のファラデーが駆け込んできた。

そういえば、ヴァーミン達と戦っている最中なにやら口の中に異物感がしていた。記憶はあいまいだが、フアラデーの言っていることを聞いて思い出した。

「俺は今から隊長を呼んでくる。完全なるとどめを刺してもらうんだ」

「ああ、わかった！」

「……」

状況を理解した。

さつきまで自分の体内にいたヴァーミンが今度はカスケードを乗っ取っている。

そして、そのことを誰も知らない。

このままでは戦造人間は全滅してしまう。

「ま……待ちなさい……!!」

「おいてめーっ何逃げようとしませんだ！俺がしっかり見張ってるからな！」

フアラデーはまだテルミットが乗っ取られているものだと思いついでいる。

こうして、ヴァーミンは易々と逃げ延び、コーデインの病室へと向かっていったのだった。

「隊長！」

「ん?どうしたカスケード」

「ご存じかとは思いますが、基地内にリバーズ獣が入り込んでいます。しかも奴はテルミットの体を乗っ取っている!」

「……何?」

「もう彼女は助かりません。一思いに止めを!」

「そうか……だが、どうして俺にそれを言う?」

「……えっ?いやだから、フラクチュアで確実に止めを刺してもらうために……」

「そうかい、この腕でか?」

「あっ」

コーディンが腕の布を捲ると、そこにはカラカラに干からびた腕があった。

とてもフラクチュアを振り回せる状態ではない。

「戦闘員には既に伝えてあるはずだぜ。なのにそのことを知らないということは……」

(シマツタ!ソコマデハ把握シテネエ!)

「とぼけるんじやあねえ、お前が敵だつて事はもうバレてるんだよ」

(抜ケ目ナイ奴トハ聞イテイタガ、コレ程トハ……ダガコイツハ腕ヲ負傷シテイル。勝

機はまだ俺にある!!)

ヴァーミンが抜け落ちたカスケードが我に返った。

「俺は一体……まさか！ 奴に操られていたのか？」

「ああ……だが今終わったぜ」

「隊長!? ……いや、お前本当に隊長か？」

「身構えるな、コーディネン34歳、身長193cm、体重96kg」

「た、確かに本物だ……本物でなきゃこんな正確な情報は知らない……しかしヴァーミンは一体？」

「体内に入って操る能力を持っていたようだが、そこんところが奴の敗因だな」

（ば、馬鹿ナ!? ナゼコイツノ体ヲ乗ツ取レナイ? ソレドコロカ、動ケン!）

ヴァーミンがいるそこは最早人間の体内ではなく、漆黒の空間だけが広がっていた。

コーディネンを操ろうとして逆に拘束されてしまったのだ。

「俺の能力は隙間に亜空間を発生させることだ。それは俺自身の体内であつても例外ではない」

（オノレエエエエ……コノ俺ガ……こんなことでエエエエエエ〜〜!）

次の瞬間、ヴァーミンの意識は消えた。

(オゲツ)

亜空間が閉じると同時に、ヴァーミンの体も圧縮されて細胞ひとつ残らずに消滅したのだから。

「えっ?ということは……もう終わりイェ!?二回に渡って続いた戦いが、今のできれいさっぱり片付いたってことお!？」

「人間の体に乗っ取って仲間割れを引き起こす……確かに厄介だったがちと俺の能力相性が悪かったようだな」

「……あつ!ファラデーとテルミットがまだ俺の部屋に!早く説明してやらないと!」
こうしてヴァーミンは、今度こそ完全に撃破されたのだった。

第13話 雷神は空を征く

「今日こうして集まってもらったのには理由がある。お前たちには、次のリバーズ獣との戦いに参加してもらおう」

フアラデー、カスケード、ロクシヨウ、そしてコーデイン。

一同は隊長室に集合していた。

「はあ……それは構いませんが、いつもはこんな風に呼び出したりしないじゃないですか?」

「うむ、今回はかなりの強敵だな。あらかじめ知らせておく必要があるんだ。特にフアラデー、必要なのはお前だ」

「えっ、オレえ?」

フアラデーが間の抜けた返事をした。

「次の敵は空にいる。当然上位種だ。だからいつものビークルでは無く武装ジェットに乗りながら戦うことになる。しかし並のミサイルだけで上位種を倒すのは非常に困難! よってお前の電気エネルギーが決定打となるのだ」

「し、しかし何故次の敵が空にいるとわかるんです？リバス獣は神出鬼没と相場が決まっているのにー！」

「………奴は150年も前からずっと生きています。俺達戦造人間の追跡を逃れてな！」
「!?」

つい最近戦闘員に就任したばかりの新人3人にとってその話は衝撃以外の何物でもなかった。

「驚くのも無理はない。だが奴は一定の周期で姿を消すのだ。必ず30年に一度……戦いの真つ最中であつてもな。これまで何人もの戦闘員が撃破に臨んだが、皆一様に逃げられている」

「失踪する、ということですか？」

「うむ。だからこそ短期決戦でなければならぬ！この“ツヴァイレイザー”でな!!」
「それは!？」

コーデンが取り出したのは重厚な拳銃『ツヴァイレイザー』。
使用者からエネルギーを吸い上げてしまう諸刃の拳銃だ。

「これは元々お前が使うことを想定して作られたものだ。だからファラデー、これから一週間お前に付きつきりて特訓を行う！こいつを完璧に使いこなせるようにな!!」
ファラデーの能力は体から電気を発生させること。

つまり、“無から有を生み出す”ことが可能なわけだ。

その特性を応用すれば、ツヴァイレイザーの欠点を補うことが可能だとコーデインは考えた。

「えっ………特訓~~~~~!?」

“ヴァニッツ”。

それは大型飛行機にも匹敵する大きさを持つ鷲のリバース獣。

その生息は全くもって奇妙であった。

ぴったりに30年に一日だけに現れ、1時間程経つと霧のように消え去ってしまうのだ。

何故このような習性を持っているのかは不明だが、人間にとって極めて迷惑なことだった。

多くの戦造人間がそのタイムリミットの内に倒しきれずに逃してしまい、しかも次回現する時には傷が完治していたため振り出しに戻るといいうわけだ。

30年前、まだボイルが生きていた頃、彼もまたヴァニッツと戦った。

両者は互角に勝負を進め、どちらが倒れてもおかしくない状況だった。

「よせ！もうすぐ奴は消える！これ以上深追いすることはない!!」

「諦めろと言うのか……？そいつは無理だ！こいつは今！ここでこの俺が仕留める！」

「おい！」

ノギのの忠告を無視してボイルは空中に飛び出した。

空気を操る能力で空を飛び、ヴァニッツに接近していく。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「……!?!」

その時、ヴァニッツは狼狽えたのか動きが止まった。

ボイルの拳がヴァニッツの胴体に命中。それで勝負が決まったかのように思われた

「何……!?!」

しかし、致命傷には至らなかった。

わずかに表皮を削り取りはしたが、それ以外の部分は既に霧のようになって消えよう

としていた。

「一歩及ばず」

ヴァニッツのしやがれた嘲笑う声を背中に受け、ボイルは止まった。

30年に一度しか現れないヴァニッツを逃がしてしまった。

その事実にはボイルの誇りは大きく傷つけられた。

「くそつたれがああああああ……！」

雲が広がる空にボイルの叫びが虚しく響いた。

「えっ、じゃあカスケードじゃなくてファラデーがツヴァイレイザーを使うの!?!なんで!?!」

病室のベッドでカスケードから話を聞かされたテルミットは思わず素っ頓狂な声を上げた。

「最初は俺も驚いたけどよ、でも仕方のないことだぜ。なんでも過剰なエネルギー吸収

をあいつの電気で補えるんだそうだ」

「それはそうかもしれないけど、あいつが射撃してるとこ見たことある？」

「……………いや、無いな」

「はあ……………うまくやれるかしら……………」

「まあ、出来る限り上手く教えるよ」

「えっ？カスケードも教えるの？」

「ああ。なんだかんだ言って銃の扱いは俺が一番！つてことだけへへへ」

「もう……………調子に乗らない!!」

その日から、エネルギー制御を教えるコーディネィン、射撃訓練担当のカスケード、生活管理担当のノギの3人による強化特訓が始まった。

それから一週間が過ぎ、ファラデー達は向かうことになった。

「くたびれたぜ……………まさかファラデーの射撃があそこまで下手くそだったとは」

「なんだよ、特訓で強くなっただからいいじゃんか！」

みっちり鍛えられたファラデー。

カスケードは小言を言っているが、その姿からは多少の頼もしさが感じられた。

「いいか、今回はいつも使っているビークルではなく特殊武装ジェットを使う。そのため内部設備もいつもより削減されている」

「げっ、冷蔵庫が空だ！帰りの楽しみなのによぉ〜！」

「それぐらい我慢しろよ！」

「しかし椅子も心なしか固いな……出来るだけ早く終わらせた方がよさそうだ」

「全員揃ったな。では行くぞ！」

4人の戦士を乗せたジェットが大空へと飛び立った。

「見えてきたぞ！」

運転席に座ったロクシヨウが何かを見つけた。

標的である巨大な鷲のリバース獣、『ヴァニッツ』だ。

「なるほど、デカいな……アレを相手にするのか」

カスケードは既に拳銃を構えて臨戦態勢に入っていた。

ヴァニッツもこちらに気が付いたらしく、爪を立てジェット目がけて突進してきた。

搭載されている銃火器で牽制を試みるも全く退く気配は無く、このまま衝突するかと

思われた。

しかしそうはならなかった。

間一髪のところまでヴァニッツは悲鳴を上げ後ろにのけ反った。

「ふううく……物体をすり抜ける弾丸！流石にこれは予測できなかったらうぜー！」

カスケードが放つ弾丸は奇妙なことに障害物をすり抜けて狙ったものだけを破壊することが可能だった。

これは特殊なエネルギーを弾に込める特訓を積んでいるからであり、これを自在に扱える戦造人間はなかなかいない。

「いやしかし……これまで何度も戦造人間の追跡を逃れている奴だぞ？もう同じ手を通じるとは思えない！」

「うっ……」

戦造人間との戦いもヴァニッツにとって初めてではない。

今までのリバース獣とは違い相手もある程度こちらの行動パターンを学習しているのだ。

「……おいロクシヨウ!!あいつどこ行った!？」

「何……」

コックピットの窓からは既にヴァニッツの姿は無かった。

「死角に回り込んだか……ファラデー！外に出るぞ！」

「えっ!!」

ファラデーは驚いているが、決して急に湧いて出てきた無茶ぶりではない。

ジェットの外に出ることは最初から想定されており、そのための訓練も既に済ませてあるのだ。

天井のハッチを開き、そこから二人は外に飛び出した。

当然何の準備もなく飛び出せば吹き飛ばされる。

しかし二人が履いているシューズから発せられる特殊な磁力が機体の上に立つことを可能にした。

しかし、それだけで自在に動けるというわけではない。

体幹でバランスを取りながら相手の攻撃を避け続けるという極めて高度なテクニクが要求されるのだ。

「うおっ」と……!!」

「早く構えろ！すぐ敵が来る!!」

コーデインはフラクチュアを取り出した。

「はっ!!」

遠心力に乗って振るわれたフラクチュアがヴァニッツの翼に直撃する。

「クエエエ……」

「どおおああああー！」

コーデインの腕に更に力が込められる。

そのまま翼を骨ごと粉碎しようとするためだ。

しかし、次の瞬間ヴァニッツの羽毛がいくつか抜け落ちた。

それは鋭利な刃物のようにコーデインの全身に襲い掛かった。

「ぐああああ……」

コーデインが後ろにのけ反ったと同時にヴァニッツは空中に逃れた。

この敵に打撃はあまり決定打にならない。

何しろ敵はこちらよりも自在に空を飛び回れるのだから。

「モウー撃テ落チルカナ」

ヴァニッツは既にコーデインに勝ったつもりになっていた。

それだけ絶望的な状況。

ヴァニッツが羽による攻撃を見せたのは初めてのことだった。

「喰ラエー！」

しかし、ジェットは突如急降下した。

それによってヴァニッツの攻撃は空振りに終わった。

「ムウ……！」

ヴァニッツの胴体に衝撃が加わった。

「今ノハサツキノ銃弾……何ヲ考エテイルカハ知ランガ、奴ラマダ戦ウ氣デイルナ！」

地面めがけて落ちていくジェットを睨みつけ

「ソツチガソノ氣ナラ乗ツテヤロウジャアナイカ！我ラ種族ハ違エド人間ノ手デ生ミ出サレタ者同士、徹底的ニ戦ウ！ソレコソガ我方使命ヨツツ」

そう啖呵を切つてヴァニッツはジェットを追いかけて降下する。

追いついた時には既にジェットは地面に激突し大破していた。

「何ノツモリダ？テツキリ急旋回デモシテ不意ヲ突コウトシテイルノカト思ツタガ

……」

「フン！ソクナトコロニ隠レテイタカ！サア決着ヲ……ウン？」

岩陰にいたのはコーディン、カスケード、ロクシヨウの3人。

そこにファラデーの姿は無かった。

「一人足りナイ……マサカ!!」

「今になって気が付いたか……今回の本命は、まだ！お前の頭上にいるぜっ！」

「何!？」

見上げると、空中にファラデーの姿があつた。

「オカシイ……モウ時間ハ過ギテイルトイウノニ何故私ハ消エナイ?」

「狙い通りだ。強力なエネルギーをぶつけることでお前を引き留めることが出来るらしいな……先代隊長ボイルが考案した対策だ」

「クツ、オノレ……ソレダケデ勝ツタツモリカ!? 時間切れマデ待ツテ次ノ世代ニ後ヲ任セレバオヨカタモノヲ、前達ハ自ラノ首ヲ絞メタノダゾ!」

「何……後の世代に託す、だと?」

コーデインの眼がヴァニッツを睨みつける。

「違うな……問題を先延ばしにしているだけ。目の前に終着点が見えているのならば! 決着をつける!! それが我々の矜持であり義務!! お前との因縁は! 今日ここで打ち砕くツツ」

「オオオオアアアアアアアアアアアアツ!」

「フーン!」

ヴァニッツが飛び出すコーデインが後を追って飛び出す。

「ばあああああああああああ!」

勢いよく突き出された拳がヴァニッツの胴体に命中する。

「マダパワー比ベヲシヨウトイウノカ! 素手デコノ俺ヲ傷ツケラレル訳ガ無イコトハ既ニワカッテイルダロウニ!!」

しかし、次の瞬間ヴァニッツは呻き苦しみだした。

「G W O O O O O O O O N ! ?」

コーデイン一人に気を取られていたため、カスケードの銃弾が目当たったのだ。

「俺達の事忘れてたな？ちよつとショックだぜ」

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアア！」

怒り狂ったヴァニッツは空へ飛び上がった。

「ロクシヨウ！俺を打ち上げろ！」

「はいー！」

ロクシヨウは両手を広げ、コーデインの体をバレーボールのレシーブのように真上に投げ飛ばした。

「ヤハリ追ッテキタカ」

「!？」

コーデインの体をヴァニッツの爪によって掴まれてしまった。

「急降下シテヤル！サツキオ前達ガソウシタヨウニナ！」

「ぐおおおおおお………」

身動きが取れないまま地面に全身を強打。

「うおっー！」

そこはカスケードが立っていた地点だった。

コーデインを放り投げたヴァニッツは次の標的をカスケードに定めたいらしい。

「てめえ！」

カスケードは咄嗟に銃を構えるが、至近距離では分が悪く反撃する間もなくのしかかられてしまった。

「うわあああああああ………」

「調子に乗ルナヨ！ サツキハ不意ヲツカレタダケダ!!……ン!?」

「何………!?!」

「だりやあああああああああああああつつつつつつっ！」

コーデインとフアラデーがエネルギーを帯びて突進してきたのだ。

「馬鹿ナ!? コノパワーッツッツッツッツッツッツッツ」

巨大な電気エネルギー波を帯びた二人の拳を受けて、ヴァニッツの腹に大きな風穴が空いた。

足をカスケードから離さざるを得ない程に消耗したヴァニッツはゆっくりコーデインの方を見やる。

コーデインも倒れそうになったフアラデーの体を支えながら、激闘を繰り広げた相手

へと向き直った。

「ウウウ……初メテノ感覺ダ……私ハ……死ヌノカ……？」

「ああ、それが死だ」

「ソウカ……ウウ……」

傍から見れば、痛みに苦しんでいるように見えるかもしれない。

怒りにとち狂っているように思われるかもしれない。

しかし、違った。

「ウワハハハハハハ！イヤア~~~~~~~~疲レタアアア!!」

「……!?!」

ヴァニッツは笑っていたのだ。

それもひどく晴れやかな顔で。

「自分ガイツドコデ生マレタノカ、全ク覺エテイナイ……暴レテハ消エ、戦ツテハ消エ、

コノ繰リ返シダツタ……ダカラ死ヌコトナンテコレッポツチモクハナイノサ……」

「……」

「楽シカツタゾ……！マタ会オウ、アノ世トイウモノガアルナラナ、フハハハハハハハ

……ハ……」

そう言い残すと、ヴァニッツは完全に消滅した。

もう二度と復活することはないだろう。

「はあつつはあつ……強敵だった……そして幸運だった……もしこの4人でなければ、確実に全滅させられていた……！」

コーデインはそこである事に気が付いた。

「……あつ」

それは交通手段のジェットが先ほどの大破していることだ。

「焦って飛び出したのがまずかったか……ジェットを壊してしまったな。よし、お前達！・基地まで歩いて帰るぞ！」

『生きて帰るまでが戦い』。そんな格言を実践するかの如く発破をかけるが、肝心の部下達はそれどころではないくらいにくたびれていた。

「無理ですよおおおおおさっきの突撃で足りなかったからもう歩けないくくく」

「お……俺も反対です……ていうかももう死ぬ……げほっげほっ」

「ここからだ」と結構距離ありますし、この二人を運んでいくとなるとまた一苦勞ですよ？俺も嫌です」

「なんだと……」

一気に緊張が抜け、コーデインはその場にへなへなと座り込んだ。

「はああ……俺も疲れたし仕方がない、救助が来るまで待つとするか……」

一方そのころ、基地本部のとある一室で二人の戦闘員が話し合いをしていた。

厳密にいえば、『ヤコブがトランスの首を締め上げながら脅迫をしていた』。

「なあいいかももう一回言うぜ？これから始まる計画にお前も参加してもらおう。＂はい＂か＂イエス＂のどちらかだけだ……聞き返したり拒否したりしたら即!!!お前の首を切断するツツツ」

「んぐつ……んんん……!!」

所変わってメインコンピューター室。

技術班の一人がゾルに殴り飛ばされた。

それを目の当たりにした他の班員達は恐怖で青ざめている。

「な……何をしているんです!?! どうしてこんな事をつ……!」
「やかましい、さっさと言われたことだけを実行しろ!! コーデインが戻ってくる前にな
……!」

第14話 機械仕掛けのリベリオン

「何も難しいことは無いじゃあねえか……ちよつと手伝ってくれればいいんだ」

「うぐつ……」

締め付ける力がさらに強くなる。

「なあ、このままでいいのか？ 圧倒的なパワーを評価されないで閉じ込められてるまま
でいいのかよアアーン！」

「……………さい……………」

「ん？ 何？」

「うるさいつつつてんだこのド外道がよおおおおおおおおおおお」

突然トランスは人が変わったかのような叫び声をあげながらヤコブの顔面を裏拳で
殴りつけた。

「ぶげあつ!？」

壁にぶつかかったヤコブの後頭部から鈍い金属音が響いた。

「うるせえええええんだよおおおおお……いいぜ……やつてやるよ……望み通り全部

ニツツを撃破した。

その際に交通手段のビークルが破損したため、救助を待っているのだ。

しかし、信号を送ってから既に10分が経過しつつあった。

普段は2分もあれば来る救援が全く来ないとなれば不安も一塩だ。

「確かに呼んだ。それなのに迎えが来ないというのは、何かあったということかもしれない……」

「!!」

ロクシヨウとその場でぐったり寝転がっていたフアラデーとカスケードはその言葉に反応した。

「この前の虫みたいなりバース獣が基地内に出たってことですか!？」

「わからん。とにかく、自分達で帰るしかないな」

「げっ!じゃあ徒歩で帰るってことですかあゝ!？」

「いや、それよりもいい方法がある。今から地面を掘って穴を作る」

「……?穴?なんで?」

トンチキな指示に三人は面食らった。

「いいから早く掘れ!横幅を広くしろ!」

わけがわからないまま穴を掘る三人

「よし、そのぐらいでいい。よっ……ぬおあああッ!」

出来た穴にコーデインが腕を突っ込み力んでみせる。

「な……なにいいいいっ!」

3人が驚愕したのも無理はない。

穴から小型のビークルが出てきたのだから。

「び、ビークルだ……ちよつとばかり古いけど……一体なぜ!」

「廃棄処分になる旧型を買い取り万が一に備えて亜空間の中にしまっておいたのだ。

さあ乗れ!」

4人を乗せたビークルは急加速で基地へと向かった。

「基地が見えてきたぞ、外からは破壊の跡は見えない……ひとまず第二ターミナルから入って中の様子を探るとしよう」

第二ターミナルは第一ターミナルと比べてかなり小さい。

左に旋回し、基地から突き出している第二ターミナルの出入り口へと向かって着陸を試みようというわけだ。

しかしその時、突如外壁に埋め込まれていた対空防御レーザーがコーデイン達の乗ったビークルに向けて発射された。

「なっ、何イイイ!?何故味方のビークルを襲う!?くそっ避けられない!!」

対空防御レーザーは空を舞うリバス獣に向けて開発されたものであり、普通なら味方の期待を襲うということはあり得ないことのはずだった。

至近距離からの射撃に旧型の機動力では対応できず、エンジン部が大破してしまっ
た。

「ターミナル内部に不時着するから瞬間に全員飛び降りろ!!」

内部に滑り込むようにして入り込んだビークル。

地面に接触する瞬間、コーデイン達4人はビークルから飛び降り、次の瞬間にビークルは炎上したのだった。

「うわーーーーーーーっ!!」

「ぐえっ」

無事に飛び降りることに成功したロクシヨウだったが、自分の方向に飛んできたフラデーの体と壁に押しつぶされて蚊の鳴くような悲鳴を上げた。

しかし、そんな茶番を遮るかのように緊急サイレンが鳴り響く。

「どうやら予想以上に深刻な事態だな……」

「リバス獣がメインコンピュータ室に侵入しているんでしうか?」

「その可能性もあるが……別の線もあるかもな……中に入るぞ!どこに敵がいるかわからん、全員負傷している以上慎重に進め!」

「おい、見てくれ！」

カスケードが指指した先にあつたのは、何かの衝撃を受けてへこんだ壁だった。

「この破壊の跡……ここで何かがあつたに違いないぜ！ここから一番近い部屋を見てくる！」

「待て、カスケード早まるな！」

コーデインの制止を聞かずに走り出すカスケード。

彼を駆りたてているのはテルミットの安否だった。

「テルミット……無事でいてくれよ……！」

カスケードは不安げに呟きながら通路を進んでいくと部屋に突き当たった。

「これは……」

中に入ると、そこには大量の非戦闘員達が倒れこんでいた。

事後ではあつたが、明らかに暴力の跡がそこにあつた。

「おい、しつかりしろ！何があつたんだ？！」

「うう……」

倒れている非戦闘員の一人から事情を聴こうとするカスケード。

「ぞ、ゾル……ゾルに……」

「ゾル……!!」

ゾル。その名を聞いて合点がいった。

数いる戦造人間の中でも露骨なまでに反発を示していたのはゾルだけ。

周りから見ても明らかに異常であった。

そんな男が遂に反逆を開始したとしたら。

「まさかあいつの仕業だということのかッツ！」

「ゾルが……」

「何？ゾルはどうした！奴は何か言っていたのか!？」

「ああ……お前らの内一人でも足止めしろってな」

「何!？」

ゾルの話を聞いて愕然としていた隙を突いてカスケードの腰にしまわれている銃“イレイザー”に掴みかかった。

「てめえ！」

非戦闘員よりもカスケードの方が銃を抜くスピードは速かった。

しかし、

「てめえら……全員そうだったのか!？」

先ほどまで倒れていた他の非戦闘員達がカスケードの周囲を囲んで銃口を向けていた。

目の前の一人を倒すだけでは解決しない。仲間にも呼べない。

全員を相手にして負けることは無いだろうが、この上ない足止めを喰らってしまったというわけだ。

「畜生……!」

「はああああ!!」

「!!」

その時、凄まじい速度で部屋に入ってきた人影によって非戦闘員達は全員なぎ倒された。

「一人で不用心に突っ込むなんてらしくないじゃん、ファラデーのが移ったの?」

「お、お前……テルミット!無事だったか!!」

人影の正体は女性戦士のテルミット。

彼女の持ち味は脚力であり、それによって超スピードでの走行も可能なのである。

また、この脚力によってカスケードの放った銃弾を蹴り飛ばすという荒業も見せてお

り、二人がコンビ足り得る理由の一つともなっている。

「ゾルの仕業なのか？」

「ええ、ヤコブの野郎も一緒よ」

「あいつら卑怯にも俺達がない時を狙って……」

「とにかく！一旦みんなと連絡を取らないと！」

“ 連絡 ” という言葉に反応したテルミットの胸部のヴァイタルコアから立体映像が映し出された。

「カスケード、テルミット、無事か？」

「ええ」

「ゾルとヤコブの奴らの仕業ですよ。非戦闘員達もみんなグルだ……」

「そうか……お前たち二人はそのまま別行動で行け。二つのチームに分かれて一定の距離を保ちながら探索を続けるが、ゾルかヤコブのどちらかを発見したら一か所に合流しよう」

「わかりました」

「いや戻らなくていい！俺がお前ら二人の相手をしてやるよ」

「何っ?!……この声はヤコブか!!」

物陰からヤコブが現れた。

どこかからずつとこちらの様子を窺っていたらしい。

「まだ、さあ行くぜ!!」

直後、カスケードの銃「イレイザー」が火を噴いた。

それをヤコブはひらりと躲した。

「2対1で勝てると思ってるのか糞野郎! テルミット、追つてくれ!」

テルミットは圧倒的なスピードで走り出し、あつという間に射程距離内に入った。

しかしヤコブは焦った様子を見せない。

それどころか二人の攻撃を難なくあしらう余裕すら見せているのだ。

「なんで攻撃が当たらない………実力差は対して開いてないはずだ!」

「こないだのピークル内の戦いでお前らのスタイルは既に見切った。頭いーぜ俺って

よオ〜」

「やかましい!!」

遂にテルミットの蹴りがヤコブの腕に直撃した。

「痛………ッ」

「!?!」

二人が息をのむのも無理はない。

ヤコブの腕はちぎれ飛び、その切断面からは電気コードがはみ出ていたからだ。

「お……お前、戦造人間じゃないのか……？」

戦造人間は機械ではなく、あくまでも有機的な生命体だ。

しかし、目の前のこの男ヤコブの体は明らかに戦造人間のそれと違った。

「あああ痛えなあオイ……そうだよ俺は戦造人間じゃあねえ……その正体はな、17年前に開発中止になった戦闘用アンドロイドだよ!!」

「何!？」

戦闘用アンドロイド。

二人も話だけは聞いたことがあった。

戦造人間よりも先に開発されたが、戦造人間よりも耐久性が低いために開発打ちとめになったという歴史の遺物。

「まあどううでもいいことだろ?もう時間稼ぎも十分だ、お前らはここで生き埋めだ。」
「!!」

ヤコブが壁を叩く。

するとたちまち天井が崩れ去り、カスケードとテルミットに降り注いだ。

一足先に脱出したヤコブはその様子を見て満足げに笑った。

「さあて、ゾルの所に向かうとしますかね……」

「二人との連絡が切れた……まさか敵と遭遇したのでは……」

「こつちに向かつてきてるかもしれないよ……」

残されたコーデイン、ファラデー、ロクシヨウは集まって周囲を警戒していた。

その不安は的中することになる。

「その通りだ」

「ゾル！ 貴様、一体何を考えている!!」

柱の陰からゾルが姿を現した。

「見ての通り、クーデターさ。ここまで来る間にいろんな設備を破壊してきたから、他の戦闘員達はそつちの対応に追われてここまで来れないだろうな」

「とうとう本性を現したか！ てめえらいったい何のつもりだ？」

ロクシヨウが憤る。

「コーデイン。知つての通り俺達はお前が消耗するタイミングを待っていた。悔しいがはつきり言つて全力のあんたとは戦つて勝てる気がしなかつたんで……そして今があんたを倒す絶好の好機だ」

「御託はいい！この場で迎え撃つ！」

「はっ！」

ファラデーとゾルが同時に飛び出し、激突した。

「うおおああああああ!!」

「うがつ!!」

ゾルの突進攻撃を食らったファラデーはいともあっさりと引き飛ばされてしまった。
いた。

「ふん、能力を抜きにすればお前の戦闘力は下から数えた方が早い！ロクシヨウ、お前もだ！俺が負ける道理はない！」

「くっ……」

言い返せないロクシヨウ。

ロクシヨウの戦闘スタイルは相手の攻撃を受け流すという独特なもの。

しかしその技は戦い嫌いな性格の賜物であり、彼は他の攻撃手段を全く持ち合わせていないのだ。

「さあ、いつまで持つかな？」

ゾルの攻撃をひたすら受け流すロクシヨウ。

しかしゾルの猛攻は一向に終わる気配がない。

もし一撃でも食らえばそれだけでロクシヨウは戦闘不能になるだろう。

「つあつー！」

「ぐっ!!」

その窮地を救ったのはコーデインだった。

横からのボディブローを食らってゾルが大きくよろめいた隙を見てロクシヨウは間合いの外に逃れることが出来た。

（くそつ、なんて一日だ……立て続けに二連戦だなんて全く厄日だぜ！俺は戦いが嫌いだというのに……こうなったら……！）

「いてててて……ロクシヨウ！俺達も体調を援護しよ……おつ？ロクシヨウ、どこ行つた？……あつー！」

吹っ飛ばされた先から戻ってきたファラデーの目は、一目散に逃げだすロクシヨウの姿を捉えていた。

「オイイイイイイイイイイイ嘘だろロクシヨウ!?マジでどこ行くんだよ!」

「うるさいツ!!二連戦なんてやったら死んじまう！俺はもう逃げるぜあばよ!!」

「……ロクシヨウお前さあ……」

ファラデーはその後姿をただ見送ることしかできなかつた。

「お前は反逆者だ。このまま再起不能になつてもらおうぞゾル！」

その圧でトランスが一瞬怯んだ隙を見て逃れた。

「はあっ……はあっ……トランスの力は危険だということ把握していたが、こんな最悪な形でそれを見せつけられるとは……うぐっ……あぁあ……」

吐血しそうになるのを抑える。

今はなるべく出血を避けたいという判断からか、あるいは単なる製造本能がそうさせたのか。

しかし敵はそんなことを考えている余裕を与えてくれなかった。

「余計なことをするんじゃないッ！とつとつとくたばれ!!」

「ゾル!? つゴハアツ!!!」

みぞおちを狙った無慈悲な一撃。

それを食らったコーデインの口からはダムのように血が噴き出した。

「最強と呼ばれている男に止めを刺すのはこのゾルにこそ相応しい……」

壁にもたれかかった姿勢から動けないコーデインは必死に考える。

(避けなくては……しかし動けん……はっ!!)

「隊長コーデイン、その首もらったアアッ!!」

ゾルの手刀がコーデインの体を引き裂こうと振り下ろされた。

しかし、なんとコーデインはそれを左手で受け止めた。

「何だ?!? 何故俺の攻撃を耐える……………はッ!!」

瞬間、ゾルはその理由を理解した。

コーデインは壁と自分の体の隙間に手を入れ、数々の戦いを共にしてきた鈍器“フラクチュア”を取り出し、それを床に突き刺すことで支柱としていたのだ。

「そんな、そんなバカな……………!」

「……………ゾル」

「うっ!?!」

「……………お前を潰す」

コーディン達の激闘を横から見ていたヤコブは鼻で笑った。

「隊長さーん……………偉そうに啖呵切つとりますが、俺が残つてゐることを忘れてねえか？今度こそ終わりだろうよ」

「おいヤコブ!!お前の相手はこの俺だ!!」

フアラデーが立ち塞がる。

しかし、ヤコブは余裕を崩さない。

「あのなあフアラデー。お前じゃあ俺には絶対勝てねえんだよ」

「うるせえ!!スパアアアアアアアキントツ!!!」

フアラデーの拳から電流が飛び出す。

しかし、そのエネルギーはヤコブの腕に吸われていった。

「何?！」

「ああ、言つてなかったか？俺はアンドロイド。お前の電気は無意味だフアラデー!!」

「そんな……………なら炎はどうだ！ステージ2!!」

フアラデーは勢い良く手をかぎすも、炎は出てこない。

「エネルギー切れだな……………もういいだろ？俺に従うかどうか、隊長が死ぬまでに考えておけよ」

フアラデーを放置してコーデインのもとへ向かうヤコブ。

「クソツ……………また背中を見てるだけかよ……………俺って、もしかして強くないのか……………」
無力感に打ちひしがれるフアラデー。

「いいやフアラデー……………お前は強い!!攻撃するんだ!!!」

後ろから聞き覚えのある声がある。カスケードだ。

カスケードとテルミットがよろめきながらも駆け寄ってくる。

部屋が崩れる瞬間、テルミットがカスケードを抱えて反対側から脱出し、回り道してここまで戻ってきたのだ。

「無理だ……………もう俺にそんな力は無い!!」

「いやフアラデー……………撃ってみなきゃわからねえ!ツヴァイレイザーを使うんだ!!!」

カスケードはフアラデーの腕に自らの手を添えた。

その手は暖かく、弱弱しいものの強い希望に満ち溢れていた。

「……………オツケーわかったぜ!」

フアラデーは腰のホルスターから新型拳銃“ツヴァイレイザー”を取り出し、震える手で引き金を引いた。

その瞬間、眩い光が銃口から放たれ、ヤコブが走っていった方向へと一直線に飛んで行った。

「……何!?ぐおおおおおお!?バカなッもうエネルギーは無いはずなのにイイイイイ……」

その破壊エネルギーをもちに食らったヤコブは為すすべもなく吹き飛ばされたのだった。

コーデイン：重傷

フアラデー：重傷

カスケード：重傷

テルミット：比較的軽傷

ロクシヨウ：軽傷

ゾル：重傷

ヤコブ：大破

トランス：比較的軽傷

こうして、主要メンバーは全員を巻き込んだ戦いは幕を閉じたのだった。

第15話 下町アポカリプス

「えっ！休みをくれるんですか！」

テルミットとロクシヨウの二人はコーデインに呼び出されていた。

「二人とも、町に降りて欲しい。トランスと一緒に。50万やる。好きなように使っていい」

「50万!? あっ行きます行きます、喜んで！」

その金額を耳にして、テルミットは一気に食いついてきた。

それも無理はない。

決して手取りが低いわけではないが、それでも50万を自由に使える機会は滅多にない。

それをポンとくれるというのだ。

「わざわざこんなことをするのは、トランスのメンタルケアだ。あいつの底知れぬ潜在能力の危険性は彼女の精神の不安定さに依存している。極力彼女の心が開けるように計らって欲しい」

「はいというわけで！ やつてきました繁華街！ いや〜新鮮ッ！」

「はあ〜」

テンション上がりまくりなテルミットと違ってロクシヨウは乗り気しない様子だ。

（ああは言ったものの、正直かつたるいつて気持ちは変わらずにあるぜ……いつも通り本部にいるつもりだったからなあ〜）

「二人とも、その店入ろう！」

「ん、おう」

「……はい」

テルミットが意気揚々と指揮を取っている。トランスも黙って二人の跡を追う。

「楽しみだったのよね！ どれにしようかな〜やつぱこのベリーフラペチーノとか？ いやでもこっちのキャラメルマキアートもいいなあ〜」

滅多にお目にかかれないメニユーにテルミットは目を輝かせている。

「そんなもんかな？ 俺にはようわからんが」

「なんか言った？」

「いいや何でもない。あつ、俺はペリエで」

（何よりトランスと一緒というのが一番の不安要素だぜ……こいつ、暴走するとあの隊長を追い詰めるレベルにまで強くなるらしいから……第一俺らにメンタルケアが出るかよ……）

トランスはそんな二人の様子が目に入っていないかのようにうつむいていた。

心なしか、過呼吸気味にも見える。

果たしてトランスの心に積もった彼らにトランスの

「うぐっ……」

廊下を歩いていたコーデインは激痛に襲われ、脇腹を押さえる。

先の戦いの傷がまだ完全には癒えていないのだ。

我を忘れて暴走するトランスに対して、コーデインは本気でぶつかつた。

「お前は……俺に敵わない!」

そう言つてトランスの敵意を鎮めたのだ。

「お疲れ」

「ありがとうございます、ノギさん」

「……まだ痛むとは、余程のダメージだ」

「あれは一か八かの賭けでしたからね……もしあそこで奴が落ち着かなかつたら、俺はきつとトランスに殺されていたでしょうね」

「そうか……やはり今の世代の強さは凄まじいな」

「ええ……コントロール出来るようになってもらえればいいんですが。トランスだけじゃない、あいつにも……」

「フアラデーのことかね」

「ええ、そのために今回あいつを呼んで……って、いねえ!?!」

本来ならフアラデーがいるはずのトレーニングルームはもぬけの殻だつた。

「あの野郎すつぽかしやがった!まだ病室に!」

「いや、病室からは既に抜けたそうだが……」

「だったら……」

駆け出すコーデイン。

「食堂か!？」

「いや。」

「だったらトイレか!？」

「フアラデーですか? 見てる限りだと入ってないですね、ハイ」

「これはその場にいた隊員の証言。」

「俺の部屋のベッドの下かア!？」

「落ち着けよコーデイン……いたら大変だろそんなところに……」

珍しく取り乱しているコーデインをノギがたしなめる。

「はっ! さてはあいつ……!」

しかし、何か思い当たることがあったのか、コーデインは部屋を飛び出していったしまった。

「おいコーデイン! どこへ……行ってしまったか」

しかし、その後ろ姿を見てノギは微笑みを見せた。

「久しぶりを見るな、彼のおんな表情は……」

「あの、すみません！」

「ん？」

声をかけられたロクシヨウが振り向くと、そこには一人の少女がいた。

戦造人間ではない、一般人だ。

「お兄さん、戦造人間ですよね？えつと……その……サインください！」

単刀直入に切り込んでくる。

「うーむ、サイン？ちよいと待つてな……ホレ」

さらさらと慣れた手つきでサインを描く。

こんなこともあろうかと普段から練習しているらし

「ありがとうございます！やっただー！これで儲けるぞおー！」

「うん？儲ける？おい、どういう意味だ！転売でもすんのかよ？」

「こらロクシヨウ、あんまり大人げないことしないでよね」

「……わかつてるよ」

立ち上がって追いかけてしようとしたところを大人しく座りなおすロクシヨウだったが、その矢先に事件は起こった。

「ねえ嬢ちゃん……チョット……顔貸しておくれよ……うぶぶ……」

「えっ、ちよつとなんですか、やめてください！」

「暴れんなよオオオいいからこつちに来てくれよオオオオ」

先ほどの少女がブヨブヨに膨らんだ男に絡まれているところを発見した。

少女は抵抗虚しく路地裏へと引つ張られていく。

「おつと？あれはもしかしてエ、事案か？」

その様子にロクシヨウはわざとらしく反応して見せた。

「ちよつとくら人助けしてくるぜ。テルミット、勘定お願いな」

「えっ、ちよつと！」

ロクシヨウは一目散に店から飛び出した。

走りながらも笑いを堪えきれない。

「ラツキイイイッ！脚力お化けのテルミットにとち狂うかわからんトランスと一緒に会食？まっぴらごめんだぜ！あいつらと一緒にいたんじや気が休まらねえ！ここはか弱い一般市民を救うことを口実にしてトンズラだぜ！ひゃっほう!!」

喜び勇んで路地裏へ駆け込む。

「んっん！ちよいとあんた！そんな小さい女の子にちよつかいをかけちやいかんでしようよ。ちよいと一緒に来てもらおうか。」

ロクシヨウはさも今たまたま通りがかったかのような素振りをしてみせる。

少女の首筋を掴んでいる不審者はブヨンブヨンと肉を震わせ振り返った。

「さっきの人……！」

「んんん？どこにだいいいいい？」

「警察さ。法律」

「いやいやいやいああああそりや嫌だよ……あんちゃんに相手してもらいたいなアア」

「はあ？」

「おほバアアアア………」

「!？」

男が突如痙攣したかと思うと、口の中から蠢く何か飛び出してきた。

「これは……なんだ!？」

出てきたのは紐状の、ウナギか何かのようなりバス獣だ。

「マジかよ……!？」

リバス獣の先端部分から口が現れ、牙を向いてロクシヨウに襲い掛かった。

ロクシヨウは慌てて身を引いたが、小指を食いちぎられた。

あと一瞬遅ければロクシヨウは右腕を失うことになっていただろう。

最悪体内に入り込まれて内部から食い破られる可能性すらある。

ふと死体を見やると、そこにはもう男の姿はなく、あるのはただの皮だけだった。

内臓らしきものはなく、濁った液体が漏れ出ている。

それはまるで無造作に捨てられた使用済みコンドームのような光景だった。

(この男も中身を食われた被害者の一つわけか! デブなんじゃなくて内臓を丸ごと食われ、このリバス獣の体液によって肉がむくんでたんだ……いや待て、真っ先に心配すべきは……)

先ほどサインをねだってきた少女がすぐ近くにいます。

彼女は戦造人間ではない、普通の人間。圧倒的に脆く、弱い。

それ故に、何よりも優先して守らなければならない。

それこそが戦造人間の使命だ。

「助けて……」

「仕方ないな……俺も戦造人間だ、一般市民を守る！ひとまず逃げるぞ」
ロクシヨウは少女を軽々と抱え、全力疾走でその場を離れた。

都市の中に敷かれた道路。

一般的な乗用車でドライブを楽しむ男性が一人。

突然、彼はドンと車体が揺れるのを感じた。

「うん？何だ、何か降ってきたのか？」

「おい、車止めるな」

「……ひいつ!？」

男は驚愕した。

車の上には少女を抱えた男が乗っていた。

それも戦造人間だ。とても逆らえない。

「悪いけどそのまま走り続けてくれ、スピード出してな……追われてるんだ」

「追われてるって……うわあああああ!?!」

背後に搭載されているカメラは、凄まじい速度で低空飛行する紐状のリバース獣の姿を捉えていた。

「逃ゲルツモリカア〜? スットロイゾ!」

「速い! 仕方ないな……」

抱きかかえられた少女は何かを察した。

(この人の体……緑色に光ってる?)

しかしその疑問に考えを巡らせる暇はなかった。

瞬間、ロクシヨウは回転を加えて少女を道へ投げ飛ばしていた。

「ウツヒヤア! 命惜シサニガキヲ見捨タカ!!」

「見捨てる……? このロクシヨウ、どんなに落ちぶれてもノルマを放棄することは決してない……」

「!?!」

時速200kmで走行する乗用車の上から投げ飛ばされたにも関わらず、少女は平然と立っていたのだ。

「馬鹿ナ? ドウシテ……」

「彼女に気を取られたお前は急に止まれない」

「ウグツ、シマツター！」

勢いのまま突っ込んでしまい、ロクシヨウにがっしりと掴まれてしまった！

「抱かれるのは好きか？そしてこの車はもうすぐ坂に行きつく。このまま一緒に落下しようや！」

車が坂の手前で勢いよくカーブしたのと同時にロクシヨウは崖の下へと勢いよく飛び降りたのだった。

「はあつはあつ、民間人になんて危ない事させやがるんだチクシヨウ!!今度会ったらクレーム入れてやるから覚悟してろよ!!……おつといけねえ今はそんなことより」

男は先ほど走った道を戻っていった。先ほどの少女が心配になったからだ。

彼女自身、自分に起こったことに驚いていたらしく、その場に座り込んでいた。

「嬢ちゃん、大丈夫かい？さっき投げ飛ばされたように見えたが」

「そうなのよ……私、確かに投げ飛ばされたはず……なのに、全然何ともない！道路のちよつとした段差飛び降りた程度の衝撃しか感じなかったわ!!一体どうして……?」

「ふーっ………なんとかこいつをあの子から引き離せた。しかし……」

先程のクレバーな言動から一転、ロクシヨウは頭を抱えた。

（ああカツコつけたはいいものの、俺一人でこいつを倒せるとは到底思えないんだよなあ……しかも今の逃走でテルミットとトランスがいた茶店から余計離れちゃった……二人が駆け付けてくれるまでこの窮地を凌げるだろうか……？）

「あなた戦造人間でしょ？だのにどうしてそんなに弱いのかよ！民間人からこんな風に罵られるぐらい頼りないなんて、恥ずかしくないの!？」

「おい……恥なんざこれっぽっちも無い。なぜならこの状況を打破する最強の手段を持つているからだ。それは……」

「逃げる」

「おーい、テルミット!」

聞き覚えのありすぎるデカイ声にテルミットはビクッと跳ね上がった。

超えのした方を見やると、トレーニングの予定が入っていて自由が無いはずのフアラ

デーが悪びれる様子もなく大手を振って駆け寄ってきていた。

「フアラデー!? あんた今日から隊長付きっ切りのリハビリに入るって聞いてたけど、すっぽかしてきたの!？」

「ヘーキヘーキ!」

「そうとも」

フアラデーの後ろからニュツと現れたのはカスケード。

「ちよつとカスケードあんたまで! 二人して無断で抜け出してきた……つてコト!？」

「わわ……」

テルミットの大声に臆したのか、はたまた男子二人の大胆不敵さに度肝抜かれたのか、トランスは縮こまった。

丁度その時、まるで二人を待っていたかのようにテルミットの胸のヴァイタルコアが振動した。

ヴァイタルコアは戦造人間の黒い装甲表皮を生み出すだけでなく、通信機としての役割をも担っている。

「ロクシヨウウからの緊急信号! あいつ手洗いしてたんじやあなかつたの!？」

「丁度いい! 助けに行こうぜえ〜! 特訓の代わりだ!」

「あーもうまた勝手に行こうとして! マジでシバかれるわよ!？」

しかし、最強と謳われるコーデインの指示を無視した男どもが今更テルミットの忠告を聞くはずもなかった。

「そんなこと言ってる場合か？ ロクシヨウが死んじゃう、さつさと行くぞ」

さつきと打って変わって冷静な態度にテルミットは呆れかえった。

もつともこんな流れにはもう慣れっこだった。

フアラデーに比べれば常識人のように思えるが、カスケードはカツコつけたがる節がある。

人気のないイレイザーを好んで使っている一因もその性格だ。

「はあく……フアラデーと一緒にバカやってるつてのに何クール気取ってんのよ……ごめんねトランス、ここで待ってて！」

うつむいていたが、ゆっくりと顔を上げる

「いえ……一緒にいきます……！」

テルミットは一瞬躊躇するも、領き、走り出した。

トランスの目はまだ不安で揺れているように見えたが、それを咎めている暇はないのだから。

何より、その様子を咎めることがテルミットには出来なかったのだ。

そこにかつての自分を重ねて……

5年程前、テルミットがまだ訓練生だったころ、彼女の心もトランスのように荒んでいた。

理由はないが、すぐ嫌われているような気がしてしょうがない。漫然と退廃的な思いをくすぶらせていけば行きつく先は破滅だ。

しかし、彼女の場合はそうならなかった。

自分と同じように不安や痛みを抱えている人物と出会ったからだ。

その名は——カスケード。

ファラデーを追って街に降りてきたコーディネィン。

しかし今、そんな些細な問題は理不尽にも吹き飛んでしまっていた。

「そんな馬鹿な……なぜお前がここにいるんだ……15年前に消えたはずのお前が!？」

コーディネィンは明らかに狼狽していた。

ファラデー等の部下達には今まで決して見せたことのない顔だ。

「ウフフフフ……久しぶりね、コーディネィン♡」

バースコーポレーション戦力部隊隊長コーディネィン。

彼の目の前に佇んでいるのは、かつてボイルとの闘いで行方知れずとなったかつて幼馴染、ミセルの変わり果てた姿だった。

次回
第16話
“ 悪魔か天使か ”

第16話 天使か悪魔か

草木生い茂る森の中に入ってから、ロクシヨウはひたすら逃げに徹していた。敵が自分一人では到底敵わない相手であること、仲間が来るまで待ったほうが良いということをわかっていたからだ。

しかし、相手はふわふわと宙に浮いている蛇とも鰻ともつかない奇妙な生物。木などの障害物を巧みにかわし、接近してくる。

加えてロクシヨウ自身には大した攻撃技がなく、本当に避け続けるだけしかできない。

そんな攻防を繰り返しては、やがて追い詰められるのも時間の問題だった。

白い体が、ロクシヨウの首を締め上げる。

「うがっ……!」

絹のように柔らかかそうな皮膚をしていたが、そんな外見からは想像もつかないほどの凄まじい力だ。

(こいつ……ふざけた見た目とは裏腹に凄まじいパワーとスピードを持ってやがる!)

「テメエヨオクモ余計ナコトシテクレタヨナアセツカク気持ちよく女の子の選定

シテタツテイウノニヨオ〜

「ゲッ!」

ロクシヨウは首を絞められ、宙に釣り上げられた。

元々ロクシヨウに大したパワーが無いことも相まって、限りなく“詰み”に近い状態だ。

「テメエモ食ツテヤリタイトコロダガ、ソレダトイズレ足ガツク……シンプルニ首ヲネジ切ツテヤルコトニスルゼ!」

「ぐわああああああ!」

万事休すな状況。

しかし、突如リバース獣の力が緩まった。

「コノ俺ニ背後カラ攻撃を食ラワセルトハ……」

その声向けられた先には、ロクシヨウの救難信号を聞いて駆けつけた戦造人間の一人テルミット。彼女が蹴りを入れたことで気を取られたのだ。

「とんだ邪魔が入ったなあ……こいつの仲間か……」

テルミットに続いてファラデー、カスケード、トランスもやってきた。

「遅かったな……半年以上待たされたかのような気分だぜ」

「ごめんて」

これで戦造人間が5人揃ったことになる。

「マアアイダロウ……ドウセソイツハモウ既ニ戦エナイ体ニナツテイルンダカラナア、オ前ヲヲ片付ケタ後、デイツデモ始末デキルトイウワケヨオ」

「何それ……私達のことなめてんの？」

「ナメテイル、ダト？フザケロ！相手スベキハタツタ4人！コレヲ恐レロダナンテ、土台無理ナ話サ！オ前ヲコソ、俺ノコトヲ何モ知ラナイダロウ？教エテヤルヨ、俺ハナ、ソレコソ100年以上前カラズツト今ト同ジヨウニ人間ノ内臓ヲ食ツテ、ソノ抜ケ殻ノ中ニ入ツテ楽シク遊ンデタノサ……シカシ、嗅ギツケテ邪魔シヨウトシテクル奴ラガ現レタ……誰ダト思ウ？ソウ、ゴ存知戦造人間共！」

「！」

自分たちよりも

なのに尚こいつがのうのと生きているということとは、先人は敗北したということに他ならなかった。

「何度モ何度モ、決マツテ数十人近クノ大所帯デ俺ヲ討伐シニ来タ、オ前ヲト違ツテ！デモ駄目ダツタ、俺ニハ敵ワナイツテワケ！ギャハハハハハハハハハ！！」

「みんな気をつけろ……そいつのパワーは凄まじいぞ」

ロクシヨウが忠告する。

こいつは上位種のピラミッドの中でもかなり上の部類だ。

実際に触れたからこそロクシヨウにはそれがわかる。

「教エテヤロウカア〜？ 寄生虫トハ違ッテヨオ、俺ハ自分ノ力デ人間ダッタモノ、ガワヲ操縦シテルノサ。ソレヲコンナ細イ体デドウヤツテルカ、気ニナルカイ？……ドウセ多人数相手ダ、答エヲ見セテヤロウ！」

「!？」

白いリバーズ獣はおもむろに両腕を広げる。

すると、その体に変化が起き始めた。

豆腐のような白い体が蠢き、変形していく。

先程まで軟体動物のような外見だったが、それがたちまち角張ったものへと変わっていく。

突起が生え、角張った形を帯びていく。骨格が出来上がっていつているのだ。

そうして伸びたは更に細かく分岐していき、四肢を形成する。

そうして体の表面積が増え、先程までのぶよぶよした肉が強張り、重さが増していく。

そこにあるのは鍛え上げられた戦士かのような筋肉だ。

「なんてことだ……こんな奴が今まで存在したか？ いや、ない！ なんなんだコイツは!!」

今まで戦ってきたリバース獣は下級上級問わず既に存在している生物に近い生態を持つていた……だがこいつは違う！決まった形が無いんだ……不定形なんだ！そ、それに、それにこの形はまるで！“人間”ッ！」

「Hello, idiots……おっと、そうだ。今後私のことは“ロバート・チャールズ”とでも呼ぶといい」

体は異常に白く、眼球は奇妙な色合いをしているが、それ以外は人間と遜色ない風貌をしていた。

「ああ、そうだ。私のことなら“ロバート・チャールズ”とでも呼ぶといい」

人間のような名を名乗るその生物は、リバース獣特有の片言ではなく、流暢な言語を発した。

これもまた奇怪なことであった。

「なん……」

カスケードの言葉は腹に膝蹴りが炸裂したことで中断させられた。

「勝負は既に始まっている」

「カスケード！」

ファラデーは攻撃で生じた隙について、ライディーンの炎で攻撃しようとした。

ライディーンとは、ファラデーが持つ超能力の名前だ。

電気を発生させるステージ1を基本とし、更にそこから派生したステージ2で炎を操ることが出来るというわけだ。

「甘いなア……考えが甘いぞ小僧」

しかし、ロバート・チャールズはその燃え盛る拳を軽々と受け止めた。

「今までそのロクシヨウとかいう唐変木でもこの俺とやりあえていたのは、ただ俺が細く小さかったからというだけに過ぎない……サシでの勝負ならそれでもよかったが、
複

こうして体格が一緒になれば話は変わる！パワーのみが物を言うというわけ
よおおおっ！」

「遅いぞクソカス共！その程度の戦闘力で俺を倒せるなどという非現実的な発想を1秒でも抱いていたのかアアアア〜!」

「はああああっ！」

「さつき俺を蹴ったのはお前だなく？」

「がっ、ああ……!」

ロバート・チャールズの手がテルミットの頸動脈を締め上げる。

(ダメ……なんとかしな……い……と……)

テルミットの意識はたちまち闇の底へと沈んでしまった。

「気絶したか……」

ロバート・チャールズ白目を向いてぐったりとしたテルミットの体のラインをまじまじと見つめた。

「うーん」

フアラデーやカスケードを放置し、テルミットの体を弄り始めた。

「貴様！……汚らわしい手で触れるなアアアッ!!」

怒髪天を衝き、カスケードが銃を乱射しながらロバート・チャールズへと激突していった。

「どいつもこいつも学習しないな！」

「ぐおっ！」

ロバート・チャールズのパワーで、カスケードは吹き飛ばされてしまった。

（大抵のリバース獣は俺達よりも強いパワーを持っているもんだ！しかしそれでも俺達が勝つてこられたのは、体構造の違いの要因が大きい……しかし今コイツは俺達と同じ体格！そうなれば、最早格闘戦において弱点は無いのか!?!）

カスケードの脳裏によぎった、諦めの思考。

これまで大勢の戦造人間が挑み、散っていった敵にたった5人で叶うものだろうか？

「さて、当初の予定通り最初に殺すのはお前だ！」

「!?」

先程までテルミットの体を撫で回していたのに、もうロクシヨウの近くまで移動している。

気絶した女性に対する興味は失せ、止めを刺すことに決めたらしい。

「ロクシヨウッッ！」

フアラデーの悲痛な叫び。

しかし、ロクシヨウはそれを風に吹かれた柳のように華麗に避けてみせた。

「何……?」

「……やつとこさ見切れたぜ」

もう一発と拳を打ち込むも、それすら躲される。

「何故だ、どうして攻撃が当たらない……!?」

「……俺を始末しようとするにあたって、人の形になったのは間違いだったな」

「何だと!? いっちょ前な口を叩くな！」

「なぜ当たらない……!?」

「俺のこの拳法は、避けることのみの特化している。具体的に言うくと、相手と自分の気を衝突をクツシヨンのように利用して軌道を反らせているんだ……相手が人なら特にやりやすいというもの! それに、さつきまでお前がリバーズ獣かわからなかったが……イ

力だな？体表のぬめりのお陰で力を流しやすいぞ、！確か「イカは空を飛ぶ」なんて書いてあった本もあったっけな……」

悠長に話を続けるその様に、ロバート・チャールズは苛立ちを隠せなかった。

「ぐぬぬ、貴様ア〜！さっきの車の件といい、どこまでも俺を苛つかせる！」

ロクシヨウはロバート・チャールズの攻撃を巧みにかわしつつ、一番近くにいたカスケードに目配せした。

その目から、カスケードは何か意図を感じたらしく、慌ててファラデーに呼びかけた。「ファラデー！今のうちに集合してくれ！ロクシヨウが時間を稼いでくれている間に、ツヴァイレイザーの構えを！」

「すまん俺、腕を負傷しちゃって……両腕じゃないとツヴァイレイザーは扱えねえよ」「考えがある。そのツヴァイレイザー、俺に渡せ！」

「え？」

ファラデーは困惑した。

ファラデーのライディーンから発生する無尽蔵のエネルギーを前提とした武器。

それ故並の戦造人間が扱おうとすると、生命エネルギーを吸いつくされて死んでしま
うはずだ。

「だからお前は俺の手を握っていてくれ。俺の体表を通してお前のエネルギーを流し込

むー！」

「あく……その手があったか！」

「感心しながらでいいからさつきと取りかかれ！時間がない！」

フアラデーのエネルギーがカスケードの手を伝ってツヴァイレイザーへと流れ込んでいく。

ロクシヨウの回避術はその時間稼ぎにうってつけだった。

しかし、停滞は長く続かなかった。

ロバート・チャールズは苛立ちを顕にして怒鳴り散らす。

「ええい、もうこんな茶番は沢山だ！拳状で当てられないというのならッ！腕だけを元の紐状に戻し！先程のように縛り上げてやるだけだくくくく！」

腕を変形させてロクシヨウの胴を縛り上げ持ち上げた。

さつきの状況に戻ってしまった。

「白い腕、ヌルヌルした触感……お前、もしかして〃イカ〃のリバース獣なのか？」

「俺の名はロバート・チャールズだと言ったはずだ！」

「ぐああああ……」

手には吸盤があり、その一つ一つがロクシヨウの顔に吸い付く。

次第にそれは鉤爪のように尖り始め、白い液体が分泌され始めた。

その液は謂わば精子のようなもので、ロクシヨウの肌をジリジリと焼き焦がす。「うぐあああつ……!」

ロクシヨウは思わず苦悶の声を上げた。

「クハハハハハッ俺の変幻自在さを甘く見たのが命取り! ザマアミロツ……!?!」
後頭部に強い衝撃。

それは、トランスによる攻撃だった。

しかし、その顔はひどく紅潮し、目も血走っている。

明らかに暴走している。

「さつきから何なんだ……こいつを始末しようとする決めて邪魔が入る……」

「ウウウ……ガアアアアッ!」

トランスの拳がめり込んでいる。

普段から筋肉質であるトランスの体だが、今はそれが更に盛り上がり、加えて白目をむいている。暴走しているようだ。

「フン、弱そうな」

「弱そう? とんでもない……なんならこいつが一番強いまであるぜ」

「ウウあつ……!」

勢いそのままロクシヨウにも襲いかかろうとしている。

しかし、不思議なことにロクシヨウの心は落ち着いていた。

「待つてくれないかトランス！俺は何もお前と戦う気はねーんだ。お前をかき乱そうだななんて思っちゃいけない。何しろ俺自身うんざりしているからな」

トランスは、止まった。

「お前、ストレスを感じてる口だろ？だからそこに介入されてると精神バランスが崩れる」

「ア……」

息切れしながらもロクシヨウの話を聞き続けるトランス

彼女のどこことなく表情が和らいだように見える。

「お前は悪党じゃねえ、俺はちゃんとわかってる。……あいつらもきつと同じだろうよ。だからさ……」

ロクシヨウが最期まで言い切るよりも先に背後にロバート・チャールズが回り込んでいた。

「お話が長いよ」

その手刀がロクシヨウの背中をかつさばく寸前。

「ウグツ!!」

ロバート・チャールズは止まった。

いや、止められた。

「……トランス！」

「うう……ぐあああああああああ！」

怒りに任せたものではない、狙いすましたトランスの拳がロバート・チャールズの胸部を貫通したのだ。

「が……ああ……馬鹿な……！こんな……これは……！」

ロバート・チャールズのその顔は、驚きに引きつっていた
かに思われた。

「……都合だ」

その真意は、狡猾な喜びに過ぎなかった。

心臓部分を貫かれたにも関わらず、ロバート・チャールズは平然としているのだ。

「俺の体は自在に変形できるんだ……心臓が胸部にあるとは限らないだろ？そこに考えが至らぬとはなあこのマヌケがあく！」

そういうロバート・チャールズの腕からは白い液体が滲み出、トランスの全身を覆い始めた。

「これが何かわかるか……クク、これは俺の精子さ」

(精子!?イカは腕から精子を出すという話を聞いたことがあるが……まさか!)

「うああああああ!!」

ゆっくりとだが精子が繊維に染み始め、やがてトランスの全身を焼き焦げるような激痛が走り始めた。

「さあ孕め! 全身で俺の子を孕め! メスクズがア〜!!」

「……止めろ!」

「!!」

このまま精子の量を増やされていたら、たちまちトランスは絶命してしまっていただろう。

しかし、そうはならなかった。

「トランス……早く腕を抜いて逃げろ……!」

「!?!」

ロクシヨウがロバート・チャールズの腕を抱きかかえ、トランスから引き離れたのだ。無論、依然として精子は流れ続けており、そのダメージはロクシヨウに行く。

「アア……ロク……シヨウ……?」

「早く行けーッ! 俺だつて早く逃げたいんだーッ!」

ロクシヨウの悲痛な叫びを受けて、トランスの表情から強張りが薄れた。

冷静さを完全に取り戻したようだ。

「ウウ……ッ」

言われたとおり自身の腕を胴体から引き抜いて逃走した。

しかしロバート・チャールズはそれを追いかけてようとはしなかった。

どの道全員始末する。その順番が変わるだけだからだ。

「お前、この俺に対して抱かれるのが好きかとか言ってたなア……いつちよまえにセックスアピールしてた割にはかなり苦しそうじゃないかア！お前の次はさっきの女、足がデカい女、残り二人の小僧にもお前同様俺の精子で犯し殺してくれるわーッ！」

「それはどうかনা！」

「何?！」

「俺達戦造人間の胸に付いてるこの装置、*“ヴァイタルコア”* っていうんだがよ……俺達が今着てるこの黒いスーツもこいつから生成されてるんだ、便利だろ?……そして今、こいつを取る！」

肘を器用に使って自身の胸部にされていたヴァイタルコアを回した。

ロックを外されたその瞬間、彼の全身を包んでいた黒い装甲が一瞬にして粉と化して撒き散らされた。

「染み込んだテメーの精子、お返しするぜ……利子付きでな！」

「うおおおっ……!!」

舞い上がった粉は本来ならそのまま風に乗って消え去るのだが、精子と結びついたことで固まり礫となつてロバート・チャールズに襲いかかる。

「今だ！フアラデー！」

チャールズがたまらず手を離れた瞬間に、ロクシヨウが指示を飛ばす。

その叫びを受け、カスケードはツヴァイレイザーの引き金に指を置いた。

「行くぞフアラデー！絶対に離すなよ！」

「了解！ マキシマム・ザ・デュエツト
”二重電磁砲”！」

引き金が引かれ、ツヴァイレイザーから圧倒的な衝撃波が放たれた。

周りの木々を薙ぎ倒し、確実に迫っていく。

「よし……!?!」

逃げようとしていたロクシヨウの腕を何かが掴むのが見えた。

「ロクシヨウ!?!」

「仲間の武器でテメエが逝ケ!!」

礫から逃れたロバート・チャールズが腕を伸ばし、ロクシヨウを執拗に引っ張ろうとしていたのだ。

先程まで人間に近かつたその顔は崩れ、醜悪な怒りを顕にしていた。

フアラデー達もそれに気づいたが、かといってこの破壊光線を止める事はできない。

チャンスは今しかなく、途中で止めれば本来の所有者ではないカスケードの命の保証もない。

「そんなに俺と一緒にいたいかよ……だったら……こつちからそつちに行つてやるよ！」

ロクシヨウは逆にロバート・チャールズの方へと走り出した！

当然ロクシヨウも逃れられなくなる、しかしそんなことは彼自身承知の上だ。

道連れにしようというのだ。

ロバート・チャールズは突然の反発力に虚を突かれ、わずかに前方によるめく。

その隙きを突いてロクシヨウはロバート・チャールズを羽交い締めにした。

「食らえエーっ！」

「ぐおおおおおー……！！！」

（何だ!?!このエネルギーは!?!電気か……炎か!いや違う!!）

直撃したことによる激しい激痛を紛らわすためか、その異様な感覚を分析していた。

フアラデーの持つ固有の超能力、《ライディーン》。

ステージ1は電気、ステージ2では炎を発生させる。

しかし、その本質はあくまで《無からのエネルギー発生》、この一点に尽きる。

圧倒的エネルギーは次第にオーバーフローし、周囲の熱を奪い始める。

（微かだがこれは……《《氷》》……!?!）

ロバート・チャールズの体は弾け飛んだ。

「やった……のか？」

ようやく倒せた。

しかしアラデーが心配なのはロクシヨウの安否だ。

「ロクシヨウ！」

「あつ、おい！」

カスケードが静止する間もなく、ファラデーはロクシヨウを探しに駆け出した。

「ロクシヨウ……ロクシヨウ……！死ぬな！！」

「《small》死んでねえ……」

「！！……ロクシヨウ……！！」

！！ロクシヨウの声が入った途端、ファラデーの目から大粒の涙がドバドバと溢れ出した。

「どこだ？どこだ……?!」

「ここだ……俺は無事だぜ……あいつが盾になって直撃は免れた……」

「良かった……い良かったあッ！」

泣きじやくりながらロクシヨウを抱きしめた。

「泣くな！痛い痛い抱くな！！」

喜ぶのもつかの間、ファラデーやカスケードのヴァイタルコアに通信が入った。

その内容は——隊長コーデインからの救難信号。

「隊長?! どうして街に……?!」

「あの隊長が救難信号を出すとは……よっほどだぞ」

コーデインは最強の戦造人間だ。

これまで数多くの窮地を一人で乗り越えてきている。

そんな彼が救難信号を送ってくるという時点で既に異常事態なのだ。

「でもロクシヨウが……!」

「俺はほっぼといっている、先に行つててくれ……とても動けないんだ……救助ぐらい自分で呼ぶさ……」

「そ、そうか……」

「テルミット大丈夫か? おい、おい!」

カスケードは白目をむいて気絶しているテルミットの体を手で擦った。

「ん、うん……ハッ! リバース獣は!」

「もう倒した! それより急いで戻るぞ!」

「え? 戻るってなんで……」

「走りながら説明する! 急ぐぞ! ファラデーも!!」

「お、おう!」

走り去るファラデー達の背中を見送った後、ロクシヨウは先程落としたヴァイタルコ

アに手を伸ばした。

「ぐ、あぁっ……痛ッ……！」

伸ばしたのだが。

届かない。

直撃してはいないとはいえ凄まじいエネルギー波を食らってしまったのだ。

全身打撲の

「あぁ……までか……選択ミスったなあ……」

後悔はない、などと言う気などロクシヨウにはさらさら無かった。

トランスを庇うことなく一人逃げていれば生き延びられたかもしれない。

そうすれば良かったとさえ思っている。

しかし仕方のないことだ。

そうせずにはいられなかった。

こんな怠惰なロクシヨウでも、遺伝子レベルで守護の使命を帯びた戦造人間なのだから。

「些細な給与アップに吊られて選抜メンバーへの招集に応じたが……しくじったなあ……こんなにも苦しい……ちくしょう……」

ロクシヨウはゆっくりと目を閉じ……そのまま地面に顔を伏した。

コーデインの前に立ち塞がったのは、かつてコーデインの幼馴染にして社長令嬢だったミセルだった。

その歪な姿を初めて見て、コーデインは動揺した。

容姿や年齢自体は全く変わっていない。

自分と同じ年だったはずの彼女が少女のような姿のままにしていることがかえって不気味だった。

それに対して、服装は完全に変わり果てていた。

身にまとっているそれは戦造人間が着用するヴァイタルコアとそこから生成される鎧繊維に酷似しているが、胸部に鎮座する媒体は緑色のヴァイタルコアとは異なり禍々しく赤い光を放っており、鎧繊維も全身を覆ってはならず、露出が多い。更には、ボイルの乱から10年以上の月日を経てポロポロになっている。

それはコーデインの価値観からすると酷く映った。

かつてのミセルもそんな格好は好まなかったはずだ。何よりもおかしいのは、その強さだ。

元は戦造人間ですらないただの人間であるにも関わらず、異様な強さ。奇妙としか言いようがなかった。

昔の彼女を天使とするなら、今目の前にいるこの人物はまるで悪魔だ。

「どうしたのコーデイン！最強なんじゃなかったの？ねえ教えてよ、どうしてそんなに弱いのか？ねえ！」

徒歩空拳による攻撃がことごとく防がれたコーデインは、渾身の力を込めてフラクチュアを振り下ろす。

構えは素人のそれ、隙だらけのところで大技を叩き込む……はずだった。

しかし、ミセルの左手によって軽々と受け止められた。

「何……!?!」

「フン……！利き手じゃあないのよ？」

「ぐおおおおお……!」

ミセルがフラクチュアを捻じり回し、コーデインの右手首に凄まじい力が加わって骨が折れる音がした。

「ぐう……!」

顔を俯けるコーデインを前に、ミセルは得意げに講釈を始めた。

「私もうあの日のミセルじゃあないわ！私とっても強いのに！貴方達戦造人間なんかよりよっぽどね！この胸に埋め込んでいただいた回路のお陰……だつてそうでしょ！貴方の1個前の隊長ボイルだつて倒せたのよ！それに引き換え貴方、まだあの日のボイルより弱いんだばおっ」

しかし最後まで言い終わることはなかった。

ミセルが喋っている間に立ち上がり、間髪入れず残っていた左の拳で顔面にフックを食らわせた。

ミセルの口からポロリと歯が抜け落ちた。しかし、それに続いて起こった現象に対してコーデインは己の目を疑った。

幻覚であつてほしいと願った。

抜け落ちた箇所から金属が析出し始め、歯を形成し始めたのだ。

生え変わりが早い等という話ではない。

全く別の物質に置き換わっている。

「あーあ、天然物の歯だったのに……貴方の知ってる昔の私の一部が消えちやつた」

コーデインは革新した。

かつての暖かみが感じられない掌。

光が消え失せた蒼い左目と、赤く輝くロボットじみた右目。

10年以上の月日を経て、全身が未知の素材で機械化されている。

「君はもう……人ではないのか……？」

「うるっせーんだよオッサンが！砂でも食ってろ！」

「グッ!？」

みぞおちに蹴りを入れられ、地に倒れ伏すコーデイン。

「くああ……！」

「あそうだ……まだある？昔私が直々に手当してあげたあのクソデカイ傷」

ヴァイタルコアによつて生成された戦造人間の鎧繊維を、いとも簡単に破き捨てた。

「あつた？」

その傷は、コーデインが隊長になる前に受けたものだった。

かつてコーデインは上位種の討伐の任務を受けた。

本来なら訓練生に上位種討伐の任が与えられることはないのだが、コーデインは訓練生の中でも優秀だったため、特別にそれが認められた。

しかし、その隊は全滅した。

コーデインの所属する隊を壊滅させた敵こそ、"ロバート・チャールズ"と名乗る、極めて狡猾で残忍な生物だった。

快樂のためだけに拷問を受け、そのうち衰弱死すると思われたのか捨てられた後、這いつつて基地へと帰還したのだった。

その時に受けた傷はほとんど治っているが、胸部の傷は今でも残っている。

これまでにコーディネンを打ち負かしたのはボイルとロバート・チャールズだけ。

そして今、かつて青春を共にした元社長令嬢によってその傷を晒されることによつて3度目の完全敗北を喫した。

「グッバ〜イ?」

ミセルが今にもコーディネンの頭にフラクチュアを振り落とそうとしている。

さしものコーディネンも、無防備な脳天にフラクチュアの直撃を食らえば頭骨が粉々になるだろう。

万事休すかと思われたその時だった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

反逆者として謹慎処分を受けたはずのゾルが突進でミセルを退けた。

「よお、隊長様」

その後を追うようにしてヤコブがコーディネンのもとに駆け寄ってくる。

「勘違いするなよ隊長様。アンタを殺すのはこの俺だからな……」

ヤコブはコーデインに手を差し伸べる。

それは天使の祝福か。

弱りきったコーデインは、ついこの前自身に反逆した二人が救い主か何かのように感じた。

——しかし、ヤコブはそんな甘いヤツではなかった。

「てなわけで、今この場で俺に殺されてくれや」

鋭利な手刀がコーデインの喉笛に突きつけられる。

やはりこの男は、紛れもない悪魔でしかなかった。

第17話 時間よ、凍れ

第17話 時間よ、凍れ

かつて幼馴染だったはずのミセルに敗れ倒れ伏したコーデインの喉元に、ヤコブの冷たい手刀が突きつけられる。

「こんなにも早くアンタを機会が来るとはな……漁夫の利とはこのことだな、ヒヒ」

ヤコブがコーデインの命を狙うのも、何も今に始まった話ではない。

初めて顔を合わせたときから、コーデインに対する敬意など微塵も匂わせず、露悪的な態度でつい最近の謀反を起こして本部をかき乱した事件もこのが主犯格の一人だ。

「……ヤコブ。貴様この俺を殺すことに執着しているようだが、何がお前をそこまで突き動かす？」

「シンプルな話さ……俺のこの肉体を見ればよくわかるぜ」

ヤコブは自らの体を覆う黒い繊維の首元を力強く引っ張って胴体を見せた。

そこから見えるのは人間の皮や骨ではなく、剥き出しの機械回路だった。

「なるほど……お前は戦造人間ですらなかったということか」

「その通り！俺は耐久性不足で生産中止になった戦闘用アンドロイド。戦造人間じゃない。そんな俺が最強の戦造人間を始末して、利権を手にする。これが俺の計画だったのさ……面白いだろ？」

身の毛がよだつ邪悪な笑顔で見下ろす。

「データベースの改竄、ヴァイタルコアに標準搭載された自動身体検査の除去。アンタに近づくには結構苦労したん……!？」

自身の計画を嬉々として語っていたヤコブだったが、その余裕は揺いだ。

コーデインの腕がピクリと動いている。立ち上がろうとしているのだ。

首に手刀を突きつけられているというのに？いつ首をはねられてもおかしくないというのに？

「立………ッ!? 動くな死に損ないがッ!」

「利権狙いか………本当にそうか？何かもつと大層な考えがあるように思えてならないが」

「………!」

コーデインは怯まない。既に敢然と立ち上がっている。

「……！おいゾル！その女のことはもういい！今はコーディネンを……」

コーディネンの見透かすかのような態度にたじろいだヤコブは話を逸らすかのように、ミセルとゾルに呼びかけるが、どうも様子がおかしい。

唸り声を上げながらミセルの胸のコア「邪心回路」を掴み取ろうとしていた。

「何なのコイツ……！」

ミセルも困惑している。

指示を無視したその狂行にヤコブは痺れを切らし叫んだ。

「ゾル貴様————ツ！！何をやっている！！ここに来た目的はコーディネンを殺すことだ！！基地を乗っ取っての反乱がしくじった以上、これが最後のチャンスなんだぞッ！」

しかし、ゾルは全く聞く耳を持たず、依然として邪心回路をむしり取ろうとしている。まるで、そこから発せられる赤い光に惹きつけられているかのようだ。

「おい……聞いているのか？」

怒りを通り越して不気味さを覚えたヤコブだったが、その状況には既視感があった。

（まさかフランスの暴走と同じ現象か……？ いや、あれは何か違う……！）

「あばひゃあああああああああああああ!!」

一直線に突撃していくゾル。

「ワンパターン……」

見切られ、いいようにあしらわれている。

「じゃあね、クソ雑魚」

「お待ち下さい！」

二人の間に割り込んで止めに入ったのはヤコブ

「ちいいつ、ゾルめ、なんて使えない奴だ……！お前はもういい」

「グツ……………」

当身を食らい、ゾルは気絶して倒れ伏した。

「いやあ失礼お嬢さん……………こいつはこのヤコブの下僕なんですがね、どうも役に立たなくて困る……………見る所、貴女も戦造人間が憎くて仕方ないようだ。このヤコブもそう！そこで一つ提案があるのですが……………この私を今ここで貴女の部下として引き抜いていた

だけないでしょうか」

「え……？」

その申し出にミセルは思わず呆気にとられた。

戦造人間でないとはいえバースコーポレーションお抱えの戦力部隊の一員。それがどうして急に掌を反すのか。それがさっぱり理解出来なかったからだ。

「ミセル忠実な僕となりましょう！手始めに貴女に手を上げやがったこの糞野郎ゾルを止め！……そうすればそこにいる『お前』も満足する」

「何を言っ……て……？」

なにかに呼応するかのようにミセルの思考が遮らる。

そこに乗じてヤコブは宣言した

「俺の正体は……Y―92。お前と同じく“ヌクリア”によつて造られた人工智能だ」

「……ヌク……リ……ア……」

従うべき主の名を表すその単語が引き金となり、ミセルの意識は完全に上書きされた。

「……そうか、才前も………だったら話は別！是非お願いするわ」

コーデインは

「ヌクリアに造られたプログラム……だと……!？」

「冥土の土産に相応しいサプライズだっただろう？お前にもすぐにとどめを刺してやるよ………というわけでミセルお嬢様、ボイルを殺したとされる微細ミサイルを頂けませんか？」

「え？」

「威力が高い分、自爆を恐れてここぞという時にしか使わないのでしようが、何分私はア
ンドロイド……危険な任務にうってつけです。綺麗な花火を上げてご覧に入れましょ
う」

「このような申し出、普通なら受けない。相手が抜け目ない奴とわかっていれば尚更
だ。しかし邪心回路の精神操作にあてられたミセルの脳はすっかり酩酊していたため、
これを承諾してしまった。」

「じゃあお願いしてみようかしら」

「ありがとうございます！では……テメエで味わいな」

「!？」

微細なミサイルを受け取った0.02秒後、ヤコブはそれをミセルめがけて指で弾き飛ばした。

ミサイルそのものが瞬間的に加速、爆発。隊長クラスの戦造人間の直接的な死因となつたその威力が彼女を襲う。

「おいお~~~~い!!社長令嬢たるもの、おだてに乗ってないでもうちよつと用心をするもんだぜ!何年も彷徨つてたからお作法をお忘れになられちまつてたかあ?ギヤハハハハハハハハハハハハハハハハッ!」

ヤコブは勝ち誇つて高笑いした。ヌクリアに施されたプログラムとは関係なく、天性の悪性から騙すことへの愉悦を覚えてしまっていたのだった。

「ご令嬢に用なんかねえ!お前を我が物とさせてもらうぞツ! “邪心回路”よ……………」
!?”

伸ばした手が、止まる。

いや、止められたのだ。ミセルに掴まれて。

「な……なぜ生きて……!？」

「さっきの言葉は全て偽りだったのか……流石は『邪心回路（オレ）』の前身」

「ぐっ……うう……クソツタレがアアア!!」

ヤコブは、自由な左腕を振りかざした。

もう計略も何もあつたもんじゃない。戦いの最中でどうしようもなく追い詰められてしまえば、最後に残るのは悪あがきしかないのだ。

ヤコブの体表面が鳥肌のように際立つと同時に、それらが一瞬にして纏まり刃が迫り上がる。全身を刃にし、力いっぱい振り下ろす。

だが無駄だった。

「ぬううつ……刃が……通らない……!」

「悔しいでしょうなア兄者……俺のようにもっと私の肉体強度を上げられれば」

「や、止めろ『邪心回路』!!俺達は……兄弟じゃあないか!お互い親愛なるヌクリア様によって造られたプログラム同士!!さっきのはほんの冗談だ!そう、アナタの力を試したんですよ!!やはりアナタこそワタクシめの主人にふさわしい!!……おい!止めろ!!こつちに来るんじゃないこの化け物ツ!!本当に俺を殺す気か!!!」

「当たり前でしょ」

ミセルの指が頭部に突き刺さり、エネルギーを注ぎ込む。

「助け蜂ウ 縄代※ 縄上 1 縄。 縄上 @ 縲? ≧ 縄? 縲後 ㄣ 縲ゆ < 縄? % 縲薙 → 縄励 ← 縄九 ◆
 縄 ∩ 縄械 s 縄控 c 縄?? 縄?? 縄昂 ▲ 縄濫 1 縲 √? 縄」 縄上 ≠ 縄」 縄キ 縄後? 縄上 @ 縲? ≧ ≧

「縛励←縛??縛械≡縛医★縛峨。縛上→!!」

声になることなくバグった電子音を撒き散らしながら、ヤコブの体は木端微塵に吹き飛んだ。機械断面が剥き出しになった金属の塊が無惨な形状となって地面に落下していく様を、コーデインはただ見ていることしか出来なかった。

戦造人間が作り出されるようになった直後は、まだ批判の声が多く、規制のためにリバース獣全体をまとめて相手取れる程の数を生み出すことが出来なかった。

そこで生み出されたのは戦闘用アンドロイド。代替品になり得ると、戦造人間反対派の期待を背負って彼らは戦場へと送り込まれた。

しかし、彼らの致命的な欠点が浮き彫りになってきた。彼らは耐久性の低く、また修理に必要な素材も高額だったのだ。それに比べて戦造人間の方は、バイオテクノロジーの著しい向上によって欠損した肉体の修復も容易になってきていた。

戦造人間を減らすために造られたはずの戦闘用アンドロイドは、皮肉にも戦造人間の強化によって生産中止に追い込まれたのだった。

そんな戦闘用アンドロイドの残骸に目をつけたのは、科学者ヌクリアだった。彼は装着者の肉体を強化すると同時に人格を捻じ曲げ、自らに都合のいい兵士へと変えてしまう悪魔の装置を密かに開発していた。

試作品の一つ、Y92をこっそり持ち出した戦闘用アンドロイドの残骸

エネルギーが空になっていたにも関わらず

その日からY-92
ヤコブはこっそりと戦造人間の部隊に潜入し、諜報活動を行うようになった。

戦造人間の必需品であるヴァイタルコアから生体スキャン機能をナーフし、またデータを改竄することによって自らが戦造人間ではないことがバレないようにした。

ある時には自らの肉体を改造して

しかし、ある日突然ヌクリアは死んだ。

プログラムに従って動いていたヤコブだが、何も感情が全く無かったわけではなかった。

ふと気付いたのだ。自分に大して忠誠心というものがなかったことに。

それ以降彼は目的を『ヌクリアのための諜報』『自らの成り上がり』に切り替えたのだった。

フアラデー、カスケード、テルミット、トランスの4人が駆けつけた。

「何が起こってるんだ……!?!」

バラバラになってはいたが、辛うじてヤコブの顔の一部だと判別できる程度に原型が残ってはいた。

「ヤコブ………なんで………ていうか死ん………ッ」

フアラデーの不安を遮るかのようにカスケードが声を張り上げる。

「救助だ、救助信号を出すんだ！何百回でも連打しろ！！秒で来てもらわないと困る！！」

最優先すべき

「しかしあの少女はなんだ……？まさか彼女が敵なのか!？」

「あの顔なんかどっかで見たことあるような……」

戦造人間の部隊における区分は、『隊長』と『隊長でないもの』の2つだけと言っても過言ではない。それだけ隊長というものは別格の戦闘力を誇っているのだ。

その隊長であるコーディネーターが、たった一人の少女の前で叩きのめされ倒れ伏しているというのは、隊員達にとっては到底信じがたい光景だった。

「救助が来るまで持たねえ！俺達で隊長を助けるんだ！」

「無理だよ！私達じゃ絶対に勝てない……隊長ですら勝てないような相手に……」

「テルミット……!!」

「うおああー……ー……ーッ!!」

「ちよつとフアラデー!」

話を聞かず飛び出した。

「あら、戦造人間にしては小柄な子ね。あなたは何か出来るの? 見せて頂戴」

「やってやるッ! まずこれがステージー!」

電撃を纏った拳を目にも留まらぬ速度で連続して叩き込む。

「そしてこれが、ステージ2だあああああああああああ!!」

電気が炎へと変わり、ラツシユの威力を増す。

ステージー程の速さは無いが、代わりに一撃ごとの重さ、威力が増している。

「ありがとう、もう十分」

しかしその拳はミセルの細い腕に掴まれ、難なく受け止められてしまった。

「電気と炎、2つの力……面白いけど、一気に見せちゃうのは悪手じゃない？」

「うわっ……!!」

「ファアラデー……ううっ!!」

トランスもファアラデーを救うべく飛び出そうとするも、ロバート・チャールズとの戦いで前身に受けた傷が痛み、よろめいて地面に激突してしまった。

「行くなトランス!!もうファラデーはダメだ!残酷だが、隊長と無事な者だけで逃げられない……!」

「そんな……!?!」

「うっ、ファラデー……!!」

トランスは絶望で顔を上げられない。テルミットも涙ながらにうめき声を上げている。

頼みの綱は軒並み倒され、万事休すかと思われた。

「……来た」

かすかなエンジン音を戦士達の耳が捉えた。

救助が来たのだ。

「お疲れ様、坊や。まず先にあつちから……」

救助に来たビークルを狙撃しようという魂胆のようだな

「……ちよつと待て!!」

「……ん?」

「確かに一気に見せるべきじゃなかったな……でも実はもう一つとっておきがあるんだ……見せてやるよ……ステージ……”3″……!!」

その宣言と共に、少しずつ腕の炎に変化が生じ始めた。

どンドン勢いを増していたが、やがてそれが止まり、

エネルギーがオーバーフローし、逆に周囲の熱を奪っていく。

周囲の空気が一瞬にして“冷えた”。

氷の塊の中に閉じ込めた

「……………!!」

「今だーーーー!!皆逃げろ!逃げるんだアアアツ~~~~~~~~!!」

響き渡るフアラデーの声。

ミセルの全身のみならず、突き出した彼の両腕もまた氷塊の中に埋もれていた。引きちぎつての脱出も試みようとしたが上手くいかなかった。体温が奪われて力が出ないのだろうか。だから彼は自らの脱出は諦めて、仲間達を逃がすことだけを最優先とした

のだった。

「

「ファラデー！」

「駄目だテルミット！隊長が最優先だ！」

「でも……」

「そうだアア〜!!俺よりも隊長を連れて行け〜〜〜〜〜ツ! ついでにゾルも……!」

ファラデーとコーデインの間には大きな距離があり、救出するのは非常に時間がかかるだろう。その間にミセルが氷を突き破って出てくる可能性を0と断じることは出来ないのだ。

コーディネンを助け、フアラデーは見捨てる。全滅を避けるための合理的な考えだ。

合理的なのだが――心は納得できない。

「見捨てるなんて嫌だ……フアラデー！」

「テルミット！」

「俺は大丈夫！……必ず帰る、約束だ」

「……………！」

テルミットは迷いを振り切り、コーディネンの元へと駆け寄ってその体を両手で抱き上げた。

「約束破ったら……蹴り入れるよ……ッ!!」

涙ながらに捨て台詞を吐いて、搬入用ハッチからビークルに飛び乗る彼女の後ろ姿を
フアラデーは見送った。

「……」

カスケードとテルミットとトランス、コーデイン、そして気絶していたゾル。

フアラデーとヤコブだった金属の残骸を残して一同はその場を後にした。

二人を閉じ込めた氷塊が遠ざかっていく。

「うううっ……フアラデー……」

一度押し殺したはずの激情が溢れ出るかのごとく、テルミットは泣き出し始めた。

今でこそ彼女はスポーツマン染みた爽やかな少女といった印象だが、かつての彼女は
足技以外の長所がないことに対するコンプレックスに悩まされていた。

ある時カスケードと出会い、同じようなコンプレックスを持っていた二人は互いの溝を埋め合うかのように打ち解けた。

生殖機能を持たない戦造人間にとって、二人の関係性は異常なものに映り、また私たちもそれを自覚しつつも依存をやめられずにいた。

そんな雰囲気を変えたのが、突然間に割り込んできたフアラデーだった。

(よっお二人さん！俺とチーム組んでくれない？俺、結構強いし役に立つよ)

(誰だお前？)

(よくぞ聞いた！俺の名はファラデー、今に世界中を痺れさせるニユースターさ)

(……なんだそりや)

(……いいんじゃない。二人だけより三人になったほうがいくらか有利だと思う)

(なんなんだお前！口ほどにもないじゃないか！)

(真の力はまだ隠してんだよ！)

(あーはいはい)

(おつ、また舌絡ませてんのか？よく飽きないよなー)

(キャッツ!?)

(ノックぐらいしろこのボケ!!)

(アンタ電気なんか出せたの……助けてくれてありがとう)

(だーから言っただろ? 真の力隠してるとてき!)

(傷口に砂鉄ビツシリだけど)

(え? ……ぎにやあああああああああああ!?)

(先が思いやられるぜ……)

過去の記憶を振り返り、泣きじやくるテルミット。

ロクシヨウの安否は確認できず、ファラデーは置き去りになっている。ヤコブは死亡。

コーデイン、カスケード、テルミット、ゾル、トランス。

残ったのは上記5名。

たった一人の少女によって、主力部隊は壊滅寸前に追い込まれたのだった。

「……………UJYUAAAAA…!!」

暗闇の中、敗れ去ったはずの魔獣が白い液体を滴らせながら再び立ち上がる。

自身を打ち破った戦士達への復讐心を燃やしながら。

「奴ら……………このロバート・チャールズによくもこんな仕打ちを……………待っている、直に思い知らせてやる……………!」